

無惨様に殺されたくな
いのでハードモード通
り越して鬼モードです
が必死に運命を回避し
ます

経済人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと気がつくくと下弦の女鬼になっていた私はいきなり無惨様に殺されてしまう。それははずだった……。再び気がつきあれは夢だったと思っていたら同じ場面を何度も繰り返すことに！

死に戻りの能力に気がついた私は無惨様に殺される運命から逃れる為に、そしてこの世界で出来た大切な人達を救う為に奮闘するのですがアニメしか知らない知識ゼロの私の運命はいかに……

目次

よく分からない内に転生して最速で死に ました。	1
鬼になった宿命を舌で感じてしまいまし た。	17
鬼ですが少女を保護しました。	34
真実を知ってもなお私は貴女が……	47
町の事を調べてたらどんでもないことにな りました。	62
サブヒロイン登場？けれど悩みは尽きま せん。	79
もしかすると転生後一番楽しい朝かもし	
れない	96
動く陰謀、そして迫られる第二の決断	107
運命の日前夜で不安ですが私にはこの子 達がいる！	123
遂に始まってしまったよ：決戦勃発だよ ！	137

よく分からない内に転生して最速で死にました。

「あれ?ここは…:…?」

気がつくとは私はまったく知らない所にいました。とても広く、とても歪なそこは階段や部屋が無秩序であり、どこが上なのか下なのかも分からない。

ただ、わかっているのは私がそんな歪んだ場所の床の上で土下座の姿勢でいること、そして、床を流れる大量の血流と胴体のない首…

「ヒイ!!?」

ここはどこなの?!?!どうしてここに!?!そしてこの状況はなに?!?!はあ!?!ホントに何事!?!

あまりの突然の連続で私の思考は大パニック。そのせいで私は目の前に立つ人物の存在に気がつきもしなかった。

「それが最後の言葉か?」

「へア?」

混乱のせいもあったかもしれない。突然声をかけられて私は間抜けは声を出してしまつた。声に反応して顔を上げたが私の視界は何故か斜めつていた。

え？と思つていたら突然どすつと何が床に落ちる音がした。何が落ちたかと思ひ見渡そうとしたが首が動かない。目だけを動かして周りを見る。そこに見えたのは首のない胴体があつた。

私はあまりの光景に悲鳴を上げた。しかし声が出ない。混乱しているはずの頭が次第に冷えていく気がする。ここまで来れば察しの悪い私でもわかる。

私は首を斬られたのだと。

あはは……。気がつくとも知らない所にいて突然死ぬなんてどんな悪夢ですか？酷い悪夢だな……

血が流れ過ぎたからなのか、それとも夢だと思ひ考えるのを諦めたのか、私の思考が止まつていく。そして、視界がどんどん暗くなつていく。

最後に見えたのは首のない胴体、つまり死んだこの体と、死に行く私を上から冷たい目で見下ろす着物姿の女性だつた。

「ヒィア!?!」

私は意志が戻った。寝てたのかな。だとしたらさつき見たあれはまさに悪夢だったね。もう見たたくないかな：

うん？

私は今置かれている状況に頭の整理が追い付かなかった。私が今いるのは歪な空間、血だらけの床、そしてさつきの悪夢で最後に見た冷たい目をした女性だ！

「最後に何か言い残すことは？」

女性が私に尋ねてきた。この女性……顔は間違いなく女性なのに声がイケメンボイスです。それにこの圧倒的なオーラは一体……

「……………」

状況が掴めずにいる私は何も発することができなかった。訳が分からない!!こ、これはどう言うシチュエーションなの!?!そもそも私はどうしてこんなところに!?!

「何も答えぬか? 言い残すことはないのだな?」

「えっ? いや、ちよつと!」

私が出つと口を開いた時にはもう視界は歪んでいた。首はもう繋がっていないので

す。

あ、あははは……。また、この夢か……。も、もしかしてさっきの夢の続きかな？ 相変わらず意味の分からない酷い悪夢だけど首が斬られた原因はわかった。はあ……。同じ悪夢を見るなんて……。もしかしてこの夢見た後に二度寝でもしたのかな？ だとしたら私は金輪際二度寝なんてしません。だ、だから……。この悪夢は！

「ヒイアアア!!」

ハアハアハア……。ひ、酷い悪夢です。もう見たくないですし首を斬られた時の感覚や死んだ感覚がまだ残っていてリアル過ぎる！もう、見たくない。だから私は二度寝なんてしないぞ！だ、だから……

お願いします!! 夢であって!!!

流星に三度目のこの光景。そして残る記憶と感覚でもうこれは夢ではなく現実だと受け止めるしかない。私は今、知らない場所、訳の分からない状況で、あの女性に殺されようとしている!!

私は土下座の姿勢でいる。着ている服は私のものではない。所々赤くなっているの

はあの女性に殺された誰かの帰り血だろう。

「もはや十二鬼月は上弦のみで良いと思っている。下弦の鬼は解体する」

あの女性です。何かを喋っている。あれ？さつきこんな事言っていましたか？手には最初に見た床に転がっていたはずの首が握られている。

そして、さつきまでは混乱と恐怖で気が付かなかつたけど、私ともう一人、土下座の姿勢の人がいる。

女性は持つていた首を投げた。そして、首は最初にあつた位置に転がった。

「最後に何か言い残すことは？」

そして、聞き覚えのあるセリフが飛んできた。

三度目の同じ光景、二回とも定位置にあつたはずの斬られた首、知らないセリフと二度目のセリフ……

ホントにもう、さすがにここまで状況証拠が揃うと私でも分かりますよ。もしかして私、死に戻りしてる？しかも少しづつ過去に遡っている。

私は覚悟を決めた。最後の確認の為、一か八かやってみることにした。

「わ、私はまだお役に立てます！もう少しだけ！ご猶予をいただけるのなら必ずお役に立てます！」

ど、どうですか？

「具体的にどれ程の猶予を？お前はどのような役に立てる？今のお前の力でどれ程のことが出来る？」

うん、予想通りだった！当たって欲しくなかったけど！けれどもこれで確証は得た！「ち、血を！あなた様の血を分けていただけののなら！私は必ず血に順応してみせます！より強力な鬼となり戦います!!」

「何故私がお前の指図で血を与えねばならぬ。甚だ凶々しい。身の程をわきまえろ。」

「ち、違います！わ、私は……」

「黙れ、何も違わない。私は何も間違えない。全ての決定権は私に有る。私の言うことは絶対である。お前に拒否する権利はない。私が正しいと言ったことが正しいのだ。お前は私に指図した。死に値する。」

そこからの記憶はないです。きっと殺されたのでしよう。まあ、知りたいことはわかったので今のところは良しとしましょうか。はあ……どうしよう……

多分4回目でしょうか？私は再び意識を取り戻した。いる場所は同じである。違いと言えば先程とまたシチュエーションが違うことです。

前は遺言を聞かれる所からでしたが、今度は男の人、いえ、十二鬼月の下弦の鬼が触手みたいなのに食べられてしまう所でした。

頭から鬼の血を浴びた。私は恐怖で動けなかった。しかし、本来の私なら発狂していたか気絶ものなのにな：やはりこれは体が違うからでしょうか？

私の置かれた状況ははつきり言わなくヤバイです！だって私、異世界転生とか言うヤツをしたのは間違いないのですから！

いや、まさか自分が体験するとは：：人生は小説より奇なりって言うし思っても見なかったことが現実起こるのは仕方ないとはいえないきなり過ぎるでしょう！！

それはまあ、アニメとか好きだし？一度くらいは異世界転生したいとか軽い気持ちで思ったこともありましたが、この世界は不味いですよ！

この世界、私が転生しちやったこの世界は間違いなく鬼滅の刃の世界です。しかもですや？私になっちゃったのは敵役の鬼ですよ！殺される可能性大ですよ！

それにこのポジションはかなり不味い!!

よりもよって私は、十二鬼月の下弦になってしまったのだから!! 下弦の鬼って確かアニメの最終回で特に出番も活躍もなく殺されたじゃないですか!!

そして、私を殺したあの女性……に変身していた人物こそがこの世界のラスボスにして諸悪の根元……

鬼舞辻無惨様!!

酷い……もう死亡確定じゃないですか! よりにもよって何でこんな場面からスタートなんですか! すぐ殺される! しかも何故か死に戻りする! これって……

死の無限ループ……!?

いや嫌だ……そんなの絶対に嫌だ!! 死にたくない! なんなら生き返りたくないけど、死にたくない!

でも生き返ると殺される! 首を斬られるのスツゴク痛いんだよ!! 死ぬのスツゴク怖

いんだよ！そんなの何回も何回なんて！！絶対に嫌だ！！

でも、どうする？アニメだと・・・

「私より鬼狩りが怖いか？」

「いいえ！！」

無惨様が下弦の女の子に質問している。無惨様に必死に訴えています。あの赤い服の子のように何とか言い逃れようとすると・・・

「お前は私の言うことを否定するのか？」

「はあ……！！」

あの子に向かって容赦なく触手が食らい付く。少し何の抵抗も出来ずに丸飲みにされてしまった。だからと言って……あつ！後ろにいた鬼が逃げた。今逃げ出した顔に傷のある鬼のように逃げようとしても……

無惨様は動きもしないうちに逃げた鬼の首を取っていた。

「もはや十二鬼月は上弦のみで良いと思っている。下弦の鬼は解体する」

うああああ!!来た!私の場合が来ちゃったよ!どどどどうしよう!?!下手に言い訳したら無惨様に「私の言うことを否定するのか?」って言われて殺される!

逃げてても無駄なのはあの鬼が実証済み。どうしよう!?!どうすれば私は生き残れる?

不幸中の幸いは私は下弦の式の鬼!遺言を言うチャンスを買えている!ならば!ここで発言を間違えなければ死亡確定コースから逃れられるかも?

「最後に何か言い残すことは?」

「私はまだお役に立てます!もう少しだけご猶予をいただけのならば必ずお役に!」

「具体的にどれ程の猶予を?お前はどのような役に立てる?今のお前の力でどれ程のことができる?」

よし!ここです!私の予想が当たればですが、ここで無惨様にダメ元で自分がまだ役に立つとアピールできれば良い!!アニメみたいに血を下さいとか何かしてもらおうお願いをした時点でアウトです。

もしも!無惨様に役に立つと認められれば!私は!この理不尽な無限死にループから解放される!

「ご、ご猶予をいただけるのなら!私は準備を整えた後に鬼狩りの柱めに挑みます!必ずや柱の首を!」

「黙れ」

「えっ?」

「私は下弦は弱いと言った。その弱いお前に鬼狩りの柱が殺れるだど? お前は自分が弱くないと? 私の言葉を否定するのか?」

「い、いえ! 違います! だから準備を…」

「黙れ、何も違わない。私は何も間違えない。全ての決定権は私に有る。私の言うことは絶対である。お前に拒否する権利はない。私が正しいと言ったことが正しいのだ。お前は私の言葉を否定した。死に値する。」

「ヒィヒィ!!」

私は無惨様に首を斬られ死んだ。

血を求めなくても殺された。殺された理由が少し違うだけでほとんど同じセリフで殺された。

復活したのは先程と同じ下弦の陸が触手に食べられる所からスタートだった。少しずつ過去に遡っていたのにどうしてなのかが分からない。戻してくれるのはここまでなのかそれとも何か法則があるのかもしれない。

そして、無惨様への自己アピール……どこで怒りに触れるか分かんないからまるで地雷原だよ……ハードモード過ぎる。

あとそれから……本当に今さらだけど、下弦の式の鬼つて男だったよね？この体間違いない女性なんですが？

それから何度となく私は挑戦してみた。しかし、その度に私は斬首されて生き返った。回数が二桁になった辺りで私は死の記憶やその時の恐怖で病みかけていた。

ああ、不味い……心が壊れそう……いや、もういつそのこと壊れた方が苦しまないで良いかも……嫌だ！やっぱり死にたくない！！

確定死亡の無限死にループなんてそんな運命なんて受け入れたくない！せっかく転生したんだ！異世界を堪能してみたいしこのまま死に続けるだけなんてそんなの真っ平です。

やっぱり……作品からの運命からは逃れられないのですか？運命は変えられないのですか？

いや!!そんなことはないはず!だって作品と違って下弦の式が女性だし下弦達はあの触手に食われて殺されるのに私は斬首されてるもの。作品とは異なる要素があるの

なら……あるいは!!

それに方向性は間違っていないはずだし、これまでの死も無駄ではない。結局殺されるのは変わってないが殺される理由とか無惨様のセリフが変わったりしている。つまり、変化は起こせることの証明です!

更に!この死に戻りの法則もわかってきました。この死に戻りはなんと!この無惨様によるパワハラ会議を長く生きているほど過去に遡っているのだ。

4回目と5回目が同じ場面スタートなのは生きている時間がほとんど同じだったからですね。

さて、ではどうするか……無惨様と話している内に無惨様の好みも分かってきたものがある。

まず無惨様は私に、

『具体的にどれ程の猶予を?お前はどのような役に立てる?今のお前の力でどれ程のことが出来る?』

って聞いてきます。これだけ聞いてると何か会社の上司か面接官みたいですね。

具体的な計画が立てられたり、自分の力で何ができるとかの自己分析ができたり、血を下さいとか他力本願ではなく自身で向上するようないな……

ビジョンと意識が高い系の部下が好きなのかもしれない。

実際に無惨様も

『十二鬼月に数えられたからと言ってそれで終わりではない。そこから始りだ。より人を喰らい、より強くなる。私の役に立つための始まり』

と言ってますしね。向上心のない鬼が嫌いなのかな？だから俺達に言われてもとか、柱から逃げてたりとか、血を分けてとかが許せないのかな？

例えば私が柱と戦いますって言っても無惨様の言葉の否定になりかねないばかりか実効性のない計画として処分されるのだろうね……

はあ……無惨様の役に立つ、自分の能力の範囲内で……クツソ……何をすれば無惨様が好きなのか分からない。私、アニメしか見てないから情報が少ないよう……

せめて、この鬼の能力が何かとか情報をもっとあって、自分をもっと強くしたり前

もって作戦の一つや二つ準備があれば……

今知っていることで、無惨様が関心を持つてくれそうなことは……

あつ！一っだけある！

「無惨様！私に、私に猶予を下さいませ！必ずやお役に！」

「具体的にどれ程の猶予を？お前はどのような役に立てる？今のお前の力でどれ程のことができる？」

「私は！私が！！無惨様を煩わしているものを取り除いてご覧にいきます！」

「……ほう？」

興味を持つていただけたようです。続きを言えと促してきました。

「はっ！最近無惨様の事を嗅ぎ回る鬼狩りがいると小耳に挟んでおります！無惨様が雑魚二人に始末を任せたもののその者らでは手に余るとか！ならば！その鬼狩りの始末、この私めにお任せくれませんか!?!」

い、言っちゃった！主人公殺す宣言しちゃいました！しかし、今はこれしかありません！私の力で倒せる無惨様の標的……

下弦の伍の累君がギリギリだった彼くらいしか思いつかないかもです。仮にも下弦の式だから累君よりは強いはずです。

どうですか？

私は恐る恐る無惨様の顔色を伺ってみる。すると、驚くべきことが起きていました。初めてです。何度も繰り返し初めて見る表情を無惨様はしていました。

無惨様が……悩んでる!!??

これは：ワンチャンあるでは!?!お願い!!来て!!この運命からの脱出のチャンス!!

鬼になつた宿命を舌で感じてしまいました。

頭が痛い：冷たい……

私は倒れてます。ええ、首は繋がっています。場所はあの床の上ではなく土の上、地面に転がっています。全身が痛いです。

謎の長考が終わつた無惨様よりターゲットにされた主人公の特徴を教えられると、無惨様の後ろに控えていた女の人の琵琶の音、多分血鬼術だと思ふけど、その効果によつて私の足元が突然なくなり私は奈落へとまっ逆さま。

このまま死ぬのかと思つたけど私はここへと放り出されてしまった。かなりの高さがあつたのと突然のことで受け身を取れなかつた為そのまま地面に激突、今に至る。

ここどこですか!? あとこんな何もない所に放つていくなんて！ 夜じゃあなければ私死んでましたよ！

それにあの高さ！鬼じゃあなければ死んでましたよ！普通に帰らせて下さいよ！痛い……

はあ……せつかく命拾いしたのになんだか喜べないですね……これからどうしよう？

この全身の打撲とか骨折とかはそのうち治るとしてこれからの方針……いや、それ以前に今からどうしましょうか？このこと何も知らないですし多分今一文無しですよね？

それに命の危機が去ったからなのか体が空腹を伝えている。お腹がキュウと鳴るような可愛いものではなく飢餓に襲われるようなとてつもないものです。

このままでと不味い。空腹で死にそうです。そう思っていると何だか美味しそうな匂いが……

「あつちですか……？」

私は地を這うようにして匂いの方へと進んだ。しばらく進むと古い建物……民家でしようか？

館と呼んでもいいくらいの大きさですが少し古びているし灯りがないので空き家かなと思いましたがいい匂いはこの中からします。

ようやく体が治りかけてきたので私は立ち上がり土を払った。

「うう、誰かいるのかな？いくらお腹空いてるとは言えこれじゃあ不法侵入だよ……」

しかし、背に腹は変えられないので私は館の中へと入りました。中に入ると匂いは強くなります。

「奥から?」

そう思つて奥の部屋へと進むと1つだけ明かりが灯っている部屋がありました。襖に穴があつたのでそこから覗いて見ました。

「ぎゃははははー!」

「ぐへへへへへへ!」

うわあ……、なんかこの世界にもいるんですね。何か異世界モノのテンプレとも言える悪人みたいな笑い声といかにもな見た目の人達……

この館の住人ではなさそうですね……

どちらかと言えばそう……盗賊団が無人の館を隠れ家にして酒盛りをしている的な？

盗賊（仮）の男が五人……大量の酒にお肉などのご馳走……、それにあれは傷だらけの女の子……？

それにしても、美味しそう……ごくり

観察に夢中になりすぎた。なんと見ている内にかなり大きなお腹の音がなっていました。

「あ、不味い……」

「誰だ!? 誰かいるのか!」

「逃げ……」

私が逃げようとした時には襖が開けられ男達と目があってしまった。

「おおっ!?! おいおいなんだよ?」

「いえ、あの……」

「綺麗な女じゃねえか！こんなところで何やってんだ？おいおい、まさかさっきの音はオメーのか？」

男に凶星をつかれた私は恥ずかしくなつて顔が赤くてなつてしまった。

「ぐへへへへへ！可愛い反応してくれるじゃん？よし！わかった！腹減つてんなら食わしてやるよ。」

「その代わり……お酌でもしてくれよ、ぎひひひ」

うーん、私つてそんなに美人なのかな？そう言えばまだ自分の体とか調べてないかも。自分の事を知らないことには方針は決められないし後で調べるか。

それより、この男達です。まあお酒をついで上げるだけなら……

「は……」

「いいね！さあさあこつちに来いよ！」

言葉に甘えるでしょう。そうと決まれば何から食べようか……なんて迷う暇もないくらいに私の狙いは定まっていました。

「おかわり…まだありましたね…!!」

まだ五つも、ある!!

「ぎゃあああああ!!」

私は一番近くにいた料理を勧めていた男にかぶりついた。男は必死に抵抗しようとしたが私の腕力の前になすすべがなかった。男の血を舌舐めしてみましたが少女のに比べるとあまり美味しくないかも。なんでだろう？

「こ、このバケモノめっ!!」

「そいつを離しやがれ!!」

二人ほどが刀を抜いて私に斬りかかってきた。

「邪魔です!!」

食事の邪魔をされなくなかったので私は二人の振り払いました。少し払った程度のもりでしたがふたりは吹き飛ばされて壁に激突、そのままピクリともしなくなりました。

「あ、兄貴!!」

「う、うわわわわわ!!」

今即死した二人がリーダー格だったのでしよう。恐怖に取りつかれ残りの二人は我先にと逃げ出そうとします。もちろん、逃がすわけがなないです。

「血鬼術！」

とりあえず何か出ろと思つて念じてみる。すると、床や壁が盛り上がり彼らの逃げ道を封じてしまった。

「へえ〜こんなことができるんだ。」

とりあえず残つた二人は土で作つた檻の中に閉じ込めておいた。別に非常食にしようなんて考えではないです。ただ、お腹も膨れて冷静に戻つたら急に恐ろしくなつてきたからです。

わ、私は……人を……何の抵抗もなく食べてしまった。あれだけたくさん食べ物が

あったのに、少女の流してた血の匂いに釣られて……気がついたらかぶりついて、そしてもつと食べたい、もつと血を吸いたって男の人達も襲ってしまった。

こ、これが鬼になるってことなの？

いくら今は鬼になってしまったとしても私は何の変哲もないただの一般人、人間だったのに。なのに、それなのに私は我を失って……

口の中にまだ血が残っている。私は気分が悪くなった。それと同時に自分を責めたくもなかった。心が痛くて仕方がない。

瞬間……私は首元のあの感覚を思い出した。何度も繰り返して記憶としてこびりついた偽りの感覚

「そう……私は下弦の鬼……強くならないと……食べないとまた……でも……」

死にたくない！けれど殺したくもない……そんな空回りした思考の中、私は捕まえた二人の方を向いた。

「ねえ？生き残る為に誰かを犠牲にする……それって悪いこと？」

よりにもよって盗賊に、それも私が仲間を殺した相手に聞くんてどうかしている。

我ながらそう思います。

「て、テメエ……なにを!?!」

「答えて……お願い……」

しかし、あまりに救いが欲しいからと、私はか細い声で聞いてしまった。すると、この盗賊達は馬鹿正直に答えてくれました。

「いいんじゃないの？俺らだって人から奪って生きてんだ、怪物が気にすることじゃないだろ」

「お、おい！そんなこと言ったら！」

「はっ!」

しまったと思い口を押さえる盗賊。その様子に思わず笑ってしまった。

「あはは……正直にありがとうね。」

私は檻をそつと触れた。

「ヒイイイ!!」

「そう怯えないで下さいな。正直に答えてくれたお礼にね、いくつか質問に答えてくれ

たら……ね♪」

「逃がしてくれるのか!？」

「何でも答えるからよ! 助けて!」

「うふふ、それじゃあまずは……」

私は盗賊達にここは日本のどこののか、時代はいつで、今何が起こっているのかなど
思い付く範囲で質問をしてみた。

命がかかっているからなのか必死に答えてくれるのでこの世界の日本での一般的な
ことは大体掴めることができました。史実の日本の大正時代そのままです。

これだけでもこの二人には感謝しないとですね。さてと……これが最後の質問です
ね。

「最後の質問です。さっきの、あの死にかけだった女の子、あんなにしたのはあなた達な
の?」

「ああ、そうさ。」

「襲った商人の家にいてな、今夜の慰みにでもと思ってたけど兄貴に楯突いたからな!」
「……そう。正直に答えてくれて本当にありがとう。」

「そ、そうか!? な、なら!」

「助けてくれるか！」

「ええ、あなた達には本当に感謝しています。」

この二人には感謝してます。情報をくれただけでなく……

「私の食事になってくれて、本当に感謝します！」

「はあ!?!ふぎけるな！」

「お前!・約束と違う!・」

「さようなら……!・」

私が念じると土の檻から鋭利な刃が生えてきて、男達を串刺しにした。

「本当にありがとうございます。だって、あなたのような人なら、私は心を痛めなくて済むから……」

最初に食べた子はどのみち死んでいた。盗賊達もあの子を誘拐してあんなことをするような悪人なのならば、無実の人を殺すよりは自分には言い訳できるよね。

「私はあの方に殺されたくはないです。でも、無実の人を殺せるほど心は鬼になれませんか。だから、殺しても心が痛まない人だけを、容赦なく殺します！」

それにしても相手が悪人と断定した途端殺してもこの程度の動揺で済むなんて、本当

に鬼になったみたいですね。しかし、躊躇はしてられません。でないと、私が殺される！心も鬼にしないと！

そろそろ夜が明ける：：仕方ないので今日はここに泊まりましようか。いや、ここ掃除さえすれば住めそうですしここを当面の拠点にしましょうか？

あらやだこの女鬼さんたら美人です!!
館内で見つけた鏡で初めて見た自分の顔を見た感想です。前世の自分とは比較にならないほど綺麗になっていました。

身長は少し高め、長い黒ロングと合わさって綺麗な大人のお姉さんって感じですよ。服は白い着物のようなものです。黒髪と白で清楚感があっていいと思いますけどこの服だとんだか死に化粧にも見えるので早めに着替えることにします。返り血もついてますしね。

ボデイは：：ああくそう!!私よりも大きい!

体の確認はできました。なので次は一番重要なこの鬼、私の血鬼術についてです。

色々試して見た結果、私の能力は土に関わるものでした。基本的には土、石を操る能力と言うべきもので、その過程に三段階ありました。

1つ目の段階は、私の周りの地形、正確には周囲にある土や石を自在に操り様々な形にできることです。

これは昨日盗賊達に使ってみせた土を盛り上げて道を塞いだり檻の形にしてみせたやつですね。とりあえず便宜上「地形操作」とでも呼びます。

2つ目の段階は、私が直に触った土、石の形質を変えること。地形操作と違い直接触ったもののみが対象ですが、本当に意のままに変化させることができます。例えば、土をさらさらにしたたり、粘りを持たせたり、固くしたり、色を変えたりなど土そのものをまったく別物にしたり、地形操作以上に細かい造形を作ったりすることが出来ます。土の檻に刃を生成して伸ばしたりしたのはこの能力ですね。こちらは「土錬成」とでも呼びますね。

そして3つ目の段階は……

「できました！ネズミさんです！ん〜いやこのデブさと可愛さはもはやハムスター……」

私が粘土で作ったネズミのつもりで作ったハムスターは土錬成の能力をフルに活用して色や触感も再現しています。このハムスターに……

「ふぬぬぬ……動け！我が作品！」

私が力を使うとなんとです！土でできたハムスターがまるで本物のように動き出しました！

「うわ〜♪ハムスターだ！餌のいらないうつ！子供の頃に世話の必要のないペット欲しいって思ったことあった気がする〜♪」

私の血鬼術の最終形態：：それは、私が作った作品をまるで生き物のように動かし命令できる能力です。これは「土傀儡」と呼びます！

つまり、私の血鬼術は土をいじればいじるほど好きなようにコントロールできる力です！

何この能力！普通に強いです！これで下弦なのですか？もしかしたら転生特典とかで神様が強化してくれたのでしょうか？

それとも、私のこの血鬼術が雑魚認定されるくらい上弦の鬼達や鬼殺隊の柱が強いのでしょうか？

うーん、次は実戦とこの世界のパワー水準とか調べないと：：：と言いますか、私のこの力、確かに強いけど戦闘向けではない気がします。

まあ、地形操作とかならまだ戦闘で使えると思いますけど、同じ操作系の能力の先輩

に響凱なんて鬼がいましたけど、半端な地形操作程度では腕利き相手に殺られかねない。

土錬成とか土傀儡は触ったり作ったりと準備とか必要だから……

「こつちから仕掛けるのはまず厳しいよね。またいきなり仕掛けられるのも不味い……」

はあ……まずはこの血鬼術に慣れて練度を上げること、そしてこの力を使った戦い方とかを考えないと……それに情報収集もあるし……ああつ！忙しい！

能力の範囲は土と関わった量に比例とかまるで土の職人みたいですね。

ん？職人？

「あつ！良いこと閃いた！」

鬼ですが少女を保護しました。

「いい考えだと思ったんだけどな……」

私は夜の町をとぼとぼ歩いていきます。手には重たい焼き物を抱えています。来たときより重く感じるのは気のせいでしょうか？

なぜこうなったと言うのも町に用があつて来たからです。実はこの焼き物、私の血鬼術で作った作品です。実際に私が作った皿を血鬼術で加工して芸術みたくしてみました。

土をいじったり術を使うのは私の練度向上になるので焼き物作りは意外にも最適だったのです。それでどうせ練習でたくさん作るなら売れないかと思つて町まで来たものの、私が外出できる時間にはすでに店は閉まつていて商談すらできず今にいたる。

今後色々やるにあたり収入源があれば便利かなあと思つたので一石二鳥の名案だと思つただけでも……

幸い、あの盗賊達の残したお金があつたので服は買えました。いやゝ遅くまでやつてくれてる服屋があつて助かります♪

「もう帰ろうかな？」

あたりを見渡すと夕食目当ての人とそれを狙った屋台で少々賑わっている。お肉を焼いた香ばしい匂いや何なら麵を啜るいい音が聞こえる。

まだお金はたくさんあるから何か食べて帰るのも悪くないと思います。そう言えば鬼は主食が人間だけど他の食べ物でもお腹は満たせるのかな？

まあ、味が楽しめるだけでもいいや。どうせこの間3人も食べたおかげか飢餓感はないですしね。

「よしっ！じゃあ何か食べていこう♪くんくん！何か美味しそうな匂いは……」

……ん？

あれ？なんだろう……店の料理よりも気になる匂いがするような気が？

「あそっ？」

匂いにするのは路地裏の方からです。暗く人氣がなさそうですが……

って気がついた時には路地裏に入ってしまった！しばらく歩き表の賑わいが聞こえなくなるくらい奥へと進むと一人の少女が倒れていました。

やつれてる……せっかく綺麗な髪と顔が台無しです。ホームレスさんかと思いましたがど着物のはぼろぼろだけどさつきまで服屋にいたから知ってますけど相当値段のする着物を着てますし、どこかの裕福なお嬢さんでしょうか？

それに足の所……怪我をしています。そこから出血してますね。多分この匂いに釣られてきたのでしょうか？

でも、何ででしょうか？確かにこの匂いは……とても甘美な匂いにする!?そう、まるでこの前食べてしまったあの少女のような……ってあれ？この顔……もしかすると……

「ん……ん……」

「あつ、目が覚めました。あの……大丈夫？」

「に、逃げて……!」

「へえ？」

「か、い、ぶつが……」

怪物……？この世界の怪物って言えば決まってますよね。

「ぎっぎぎぎ！やつと諦めたか稀血の小娘が！早くこの俺に喰わせるんだ！」

はい、来ましたね。角も生えてるし発言もアウト、鬼の登場ですね。それにしても、稀血って？なんだか聞いたことがあるような……

「ひ、ヒイ！」

少女は鬼を見え逃げようとするが足が動かせない。なるほどです。あの足の怪我はこの鬼から逃げる時についたものですね。

「お前を喰えば俺も異能の力に目覚めるかもしれない！そうなれば俺も十二鬼月になるれかもしれない！」

「お姉さん！逃げて！」

え、私？かわいい上に他人の心配ができるなんてなんて好印象な娘なの！まあ、そうでなくてもこの娘はほっとけないですけどね。

「あのうちよつといいかしらっ？」

「なんだテメエ!!テメエも鬼か？ならこれは俺の獲物！俺の稀血だ！他を当たれ！」

はあ……やる気まんまんって感じですね。さて、どうしましょうか？鬼同士の戦闘って成立するのかな？そもそも私、戦えるのかな……

「引かねえならとつちめて……って！そ、その目は！」

「目？私の目がどうかしたの？」

「その目の数字は!!? テメエ、いやあ、アナタは！十二鬼月でしょうか!?!」

「えっ？うん、まあ、一応？」

下弦だけだね。

「も、申し訳ありません！そうとは知らず失礼な態度を！」

あゝれ？急におとなしくなった？やっぱり下弦でも十二鬼月って鬼の中では偉いんだね。

「あ、あの……も、もしかするとアナタも稀血が目当てですか？で、でも先に追い詰めたのは俺……私なので……」

平服しながらも自分の獲物を取らないでと懇願してくる鬼。確かに横取りは良くないと思おう。それによくわからないけどこの娘の血……今は理性があるから大丈夫ですが空腹の時だったら有無を言わずに襲ってたかもしれない。それくらいに美味しそうです！

そりやこの鬼も欲しいわけです。しかし……大変申し訳ありませんが

「申し訳ありませんが、失せて下さいな。さもないと……」

「ヒイイイ!!」

ええええ！待って下さい！まだ言い終えてないのに！そんなに怯えて逃げなくて
も……まあ、いいや。

少女を見てみると気を失っていました。元々疲れてたのにあんなのに絡まれてはそ
りやこうなるでしょう。でも良かった。気絶していると言うことは先程の会話は聞か
れてませんね。

私は少女を優しく抱きかかえ彼女を連れて帰りました。

「う、うくん……あれ？ここは……」

「あ！気がついたかしら？ここは私の家ですよ」

あの盗賊の隠れ家だった館、もう本当に私の家にしちゃいました。ただいま絶賛改造

中です！

「え……あの、その……」

少女は困惑しているのか質問をしたいようですが弱っていてうまく言葉がまとまっていけないです。

「まだ無理をしないでね。そうだ！お腹空いてない？ご飯買ってあるの……」

屋台で買ってきた焼き鳥に焼き魚……うーん、病人？食べさせるようなものではないですよ？ああもう！もつと気をきかせてお粥とか作ってあげればよかった！

「ありがとうございます……」

あ、食べてくれました。ほっ……あらあら、スゴイ食べっぷりですね。よほどお腹が空いてるのでしよう。

彼女が食べ終わるまでそつとして置いてあげました。そして、彼女が食べ終わり顔色が良くなった所で彼女から話を聞くことにしました。

「私は、ある商家の娘です。しかし先日、家が賊に襲われてしまいました。」

賊……賊、まさか。

「金品は奪われ私の姉が拐われてしまいました。さらにその襲撃の時の怪我が原因で父が亡くなってしまい……う、うう……」

「それ以上は話さなくてもいいです！ さぞ辛かったですよね……」

私は彼女をそつとなでてあげた。すると、彼女は私に抱きつき私の胸元で泣き出してしまった。

私はそのままにしてあげた。私も頭の中で情報を整理するのに忙しかった。

あれ？もしかするともしかしなくてもその賊つてこの館で殺ったあの人達ですよ？そして、拐われた姉つて言うのはこの子のお姉さん……

それに稀血つて……確かにアニメでも出てきた用語だったはず。確か鬼にとっては一人食べたただげでも相当力を得られるご馳走だったはず。

なるほど、あのとき感じた違和感の正体がわかりました。この子の姉ならきつとその子も稀血だった可能性が高い。ならば一番美味しく感じたのも、私の血鬼術が思ってたより強かったのも頷ける。

となると問題は……

この子をどうしましょうか？別に食べるつもりであの鬼から助けたわけではないです。なんとなくあの食べてしまった子に似てたから罪意識で助けたわけで、回復したら逃がすつもりでしたけれど。

そんな貴重な存在で、なおかつあの子の妹となれば話が変わります。

彼女があの子の妹なら、私は姉を食べてしまった責任として彼女を助けてあげたいです。しかし、その場合は私は彼女に真実を伝えなければなりません。

あまりに辛い真実なので伝えるのも心苦しいですが、何より私が鬼であること、それを伏せたとしても盗賊と姉を殺した殺人鬼……どのみち鬼か……ってことになります。するとどうでしょう？私はこの子にとって姉の仇になりませんか？

なら、真実を伝えずに予定通り帰してあげる？論外です。今の彼女は天涯孤独、家も家族も失っている。それに稀血なんてレアな存在なのですから鬼達に狙われる危険も……

ならいつそのこと私が……って馬鹿か私は!!

「すいません、見ず知らずの方に助けて貰ったばかりかとんだご無礼を……」

「気になされないで下さいな」

どうしよう……

私は、結局何も伝えられませんでした。一方でそのままにする気にもなれなかった私は彼女が身の振り方が決まるまでここに居て良いと伝えるだけにとどまりました。

この結果が、あのような末路だと分かっていたら私はこんなことはしなかったでしょう……

彼女は「志保」と名乗りました。お風呂に入れて綺麗にするとやっぱり美少女でした。

「あら綺麗！」

口に出ちやいました。

「そ、そうですか？綺麗ならお姉さんの方が……あつ!!」

「ど、どうしたの!?!」

「ごめんなさい、私……恩人の名前すら聞いていませんでした……」

「あつ名前ね。私は……」

あれ？この鬼の名前つてなに？この鬼、アニメには存在しなかった鬼ですし、そもそも下弦の鬼達の名前すら知りませんし……そうですね白い着物を着てた鬼なので

「白亜……」

そう名乗ることにしました。

普段は改築した日の光が届かない奥の部屋か焼き物作りのために一から作り上げた工房に籠り、外出は夜だけにしていきます。

なので、私は彼女に、生まれつきの病で日光に当たれず世間離することにした女と説明しました。

昼間はひたすら作品を作り専念しました。人型の傀儡をたくさん作っているからです。この人型達は館の改築に専念させるつもりです。もちろん、彼女にばれると怪しまれるので普通の焼き物も作っています。

「お茶をどうぞで」

「ありがとうございます〜♪」

「いえ、お仕事頑張ってください」にこつ

いや〜!!可愛〜♪

何この子!頼んでもないのにお茶を持って来てくれるなんて!それにこの笑顔!こんなのに何時間でも頑張れちゃう!

お茶だけでなくこの子はご飯を作ってくれて掃除までしてくれるのです。しかも上手!これは将来いいお嫁さんになれますね。

「あの・・・お姉さん」

「は、はい!」

ま、不味い・・・可愛さあまりについ返事が固く・・・

「もの凄く沢山作ってますね・・・」

彼女が指しているのは集中し過ぎて気がつきませんでしたがかかなりの量になってきた鉢や皿、置物でした。

「これなんてまるで名将が作った芸術品並みに綺麗です。こちらは逆に質素ですがまったく同じものがこんなにも・・・」

ああ・・・練習で一つに能力を集約したものと複数に能力をかけて作ったものですね。

「うん……綺麗に焼けたものはこの間売りに行ったのですが……」
私は事情を説明しました。

「なるほど……分かりました！私に任せて下さい！」
「うん？」

眞実を知つてもなお私は貴女が……

数日後の夜……

「あつ！お姉さん！全部売れましたよ！」

「うっそん……」

志保ちゃんに任せろと言われて焼き物を渡して数日後、こうして彼女に言われた場所に来てみると彼女が焼き物屋を開いていてしかも完売していました。

「えへへ〜これでも商家の娘ですから〜♪」

「いやいや！この店どうしたの？それにどうやって全部売ったの！高そうなのとか安そうなの！」

「お店は父の知人で空き家を持って余している方から格安でお借りしました。綺麗なお皿

とかは白亜さんの腕がいいおかげで高く買ってくださいましたよ？」

「……安いのは？」

「はい、前に白亜さんから聞いたひやつきんなる戦術を参考にして小銭で価格にしましたらかなり好評で、主婦やお店の人まで買っていききました。これもあれだけの量で品質が同じものを作る白亜お姉さんのなせる技です。」

ああ：あれ？私がいこれ百均にありそうとかって言ったらそれは何ですかと食い付いて来たから話してあげましたけど、あの話だけで？

なんだかこの子私のこと持ち上げてくれますけど、私のはチート技（血鬼術）ですし、何よりこの短期間で店立ち上げて成功させるなんてこの子の方がすごいような……

「えへへへ」ちら、ちら

あれ？この子、さつきからチラチラこつちを見て頭を動かしているけど……まさか……

「いや〜志保ちゃん凄いいね〜よしよし♪」

「えへへえへへ♪」

うわ〜凄い可愛……物凄く喜んでくれるよ……尊くて死にそう……

「白亜さん？」

「はっ!?意識が飛んでた!……とりあえず片付けを手伝いますので帰りましょうか?」

店仕舞いを終えて彼女と共に帰路に付く私は内心とても安心していました。彼女と一緒にいることに安心感を覚えはじめたことには否定しませんがそうではありません。

「♪」

「あら?志保さん今日はいつもより笑顔が素敵ですね。何かいいことでも?あ、全部売れたから!」

「はい、それに目利きの人からも好評だったので上手くいけば今後に繋がります!」

作品が全て売れたこと……まあ店舗の家賃とか諸経費抜きにしてもかなりの儲けなのでウハウハなのですがこれも違いますね。

「でも……それだけではないです」

「うくん?じゃあ何か面白い話でも聞いたの?」

「面白いかは知りませんが……最近、泥棒とかゴロツキが一人もいなくなつて商売がしやすくなつたと買いに来てた人が行つてました」

ああ……それはですね、犯人は私です。もう二度と志保さんをあのようなことにはさ

せないと思つて商売をすると提案されたあの日から傀儡達を使つてバレないように悪人を捕まえてました。

これで安心して志保さんを町にやれますし、私も保存食を手に入れられたので一石二鳥です。まあ飢餓の心配がない安心感もよりもそれ以上に、今日の彼女、志保さんを見て私はとても安心したのです。

「これだけの商売の腕……これなら志保さんはもう大丈夫ですな」
私は彼女に思つたことを話すことにした。

「商売をしたいつて提案された時ね、驚いたけど上手くいけば一人立ちできるつて思つたんだ。軌道に乗るまでは勿論面倒を見るつもりだったけど……これなら安心です。」

志保さんは黙つて聞いてくれています。

「なので、どうでしょう？このまま……また町に住みますか？私の屋敷は町外れですのでここまで行つたり来たりは大変でしょう？」

「……お姉さんは？」

「私は……まあこんな体質ですので広い屋敷に籠つてた方が良いでしょう。だからあそこに残るわ」

嘘ではない。それに人目につかない方がいいですし、人が多い所だと何かボロを出し

かねませんからね。

何よりも、彼女は私と一緒にいない方がいい。

私は……鬼です。人を食べる本物の化物です。おそらく、転生を仕方が違っていれば本能に負けてこの間の鬼のように人を襲っていたかもしれない。

神に誓って私は志保さんを襲いません。しかし、私が化物だと知った時、彼女からどう思われるのだろうか？

それが……無惨様に殺されるのと同じ位怖いです。

それに、いずれは私も人と、鬼狩りと戦う時が来るでしょう。そうなれば正体がバレるだけでなく、この子も巻き込まれる可能性がある。

だから、彼女が商売をして一人立ちする手伝いが済んだら身を引くつもりでした。勿論、売り物として作品は志保さんに提供し続けますし、他の鬼に襲われないように傀儡達に見守らせますし時折は私も行くつもりです。

「お姉さん、白亜さんは私が嫌になったのですか？」

ずっと黙っていた志保さんがストレートに聞いてしまいました。勿論私は首を横にふりました。

私は志保さんが嫌いな訳がないです。会いたくない訳ではなくただ、距離を置くべきだと思っただけです。

「なら、白亜さんが嫌でなければ……これからも私を白亜さんの側に置いて下さい！」

「え？……はあ!？」

「私は、大恩のある貴女に恩返しをしたかったです。じゃないとこんなお願い、厚かましくてできませんから……」

「へっ？この子何言ってるの？恩返し？お願いしたいことがある？」

「私はこれからも貴女の所で一緒に暮らしたいです！料理でも洗濯でも、お金儲けもできます！だから……私を一人にしないで……くださいませ」

……ああもう。何が志保さんの為にですか。正体がバレたら怖いのです？それはこの子ではなく自分を守る為ではないですか！

私は志保をそつと抱き寄せました。

「わっ!」

「ごめんなさい、無神経なことを口にしました。分かりました。私でよければずっと側にいますよ、一人にはさせません」

「白亜さん……」ぐすっ

泣くほど嬉しいのかこの子。私もこの子のことが好きだから嬉しいですが、私にはこの子の姉を食べた償いきれない罪が……

この喜びと罪悪感が絡まり合いより重く私にのし掛かって来るのを感じます。

あの日、あの助けた日に私は覚悟を躊躇った。ならば私は今日この日から覚悟を決めよう。

もうこの罪から逃げない。私はこの重さと向き合い、彼女を幸せにしてみせる。その為にも、折りを見てこの子に本当のことを話す。

「なら、今日は白亜お姉さんの作品完売とその……この記念に……」

「はいはい、今日はどこかお店で美味しいでも食べましようか?」

「やった〜♪私!是非お姉さんに食べて欲しいお店があるんですよ♪」

彼女は上機嫌で歩きはじめました。

「白亜さん〜外食〜♪」

はあ……行きますか。それにしても、この子はそんなに嬉しいのか。そして私までもが嬉しく感じるこの気持ち……

これは百合か？ いやいや、どうかと言うと娘を見る愛しさか？

さてと、これから忙しくなりそうです。彼女に真実を伝える覚悟を決めるのもそうですが、同居を本気で決めるならばこれからの対策を本格的に進めないと。

昼間とか彼女を守ったり町に敵がいなかを索敵する為の土傀儡を作ったり、新しい作品を作ったり、鬼狩りを迎撃するプランを練ったりと……

考え事をしながら彼女を追って歩きはじめた時でした。鬼の勘とでも言うのでしょうか？ とてつもなく嫌な予感、殺気を感じたので私とつきに動きました。

首を狙った刀を私は袖から出した土の剣で防ぎました。

「ほおーう、俺の一撃を防ぐとは、お前の反応もいいがその武器も凄いな」

この襲撃者余裕なのか話しかけてきましたよ。あ、ちなみにこれはいざって時の為に常に持ち歩いて触ってる粘土です。触れば触るほど自由が効く私の血鬼術で作ったので硬度はダイヤモンドを軽く超えていますよ。

「今ので死んどけば苦しまなくて良かったのになあ！」

「随分と酷い挨拶ですね……誰ですかっ!!」

顔面も体中も傷だらけという凶悪な面相に短気で荒々しいこの男は……この刀に隊服：鬼殺隊ですね。隊服の胸元を大きく開けており、その上から大きく「殺」と刻まれた白い羽織を着用している。

そして、何となく感じるこの狂気と強者のオーラ……この人は、柱：ですね。

「……これは不味い」

感覚で分かる、今の私では確実に勝てない。

「鬼の癖に堂々と町中を歩いた事を後悔するんだなっ！」

いやっ?!町中で殺り合うな!!なんて事を言わせてもらいう前に彼は斬りかかってきた。

最初の一撃、二撃はどうか防げました。しかし、どんなに得物が優秀でも肝心の私は剣の素人。どうにか首を守るがじわりじわりとダメージが蓄積されていく。

地形操作で壁を作ることも試みたが一瞬で斬り壊されるので頼りにならない。反撃

の機会を窺うのだが、相手の攻撃につけている隙がない。

「死ねよおらっ!!」

「しまっ!?!」

武器を腕ごと切り落とされた。とても痛く斬られた腕を押さえようとしたがどうか自制し残りの手で武器を作ろうと地面に触れようとしたが、敵は俊敏です。

「おらっ!!」

「きゃあああああ!!?!」

もう片方の腕も切り落とされた。私は追い詰められた。武器もなく、腕がなければ土錬成は使えない。地形操作では歯が立たないし、土傀儡達を館から呼んでも時間はかかるしきつと役に立たない。

並べるだけで気が滅入る悪条件。満身創痕でもう抵抗する気力もなくなってきた。

しかし柱は手を緩めない。

いや、もうトドメをさせるのに殺らないのだから手を抜いているのかもしれないね。

彼は私をなぶるように足を、腹部を、頬を鋭い痛みで貫かれる。度重なるダメージで鬼である私は、動くことすらできなくなりへたりこんだ。

そんな私に彼は刀を突きつける。

「もう終わりか？」

ここまで実力差があるのか。下弦と柱ではここまで差があるのか。これは下弦達が柱から逃げるのも無理はないと思う。

無惨様……これは、無理ですよ。

これには思わずホールドアップ。私は苦笑を漏らした。

「……参りましたよ。もういたぶられるのは御免ですよ。最もあなたは美人の私を苛めでも嬉しそうではないですが」

「俺にそんな趣味はねえよ、ただ……最近クソ腹立つ野郎と女鬼を見たからよ。少しお前で憂さ晴らしたかもな」

そんな理由で苦しめないで欲しいんですが……いや、もうそんな小言を言う余裕がない。抵抗できない、実力差と理不尽に虚しくなる。

その虚しさが私に生きる為の抵抗を止めさせた。

「ほう、醜い鬼の癖に潔いがいいな。もう、楽にしてやるぜ！」

また斬首されて死ぬのか……私は怖いのを少しでも防ぐために目をつむる。刀で肉が斬られる音、しかし私の体ではない。

「お、お前!?!なにやってんだ!!?!」

「グツ……がつは！」

「な……なんで……どうして……?志保さん!!」

彼女が、私と柱の間に入って、それで……

「志保さん!……しっかりして!志保さん!!」

私は彼女を胸に抱えた。体が冷たい……

本当ならちゃんとお抱えて支えたいが腕がないので叶わない。

「う、うう……お姉さん……よかった……」

「どうして……!」

「だって……私は、もう大切な人に、先に逝って欲しくは……げほっ!」

柱は動揺していた。それが人間を斬ってしまったからなのかそれとも信じられない

ものを見たからなのか。

「お、お前！どうしてソイツを庇った！ソイツは、ソイツは！」

「し、知ってますよ、白垂お姉さんが、鬼だつてことくらいは……」

あの日、家族や家を失い辛く悲しみに暮れる暇もなく、怪物に、鬼に襲われて絶望した時にふと現れたのはお姉さんでした。

私は気を失いかけていましたが、かろうじて記憶は残っています。あの怪物とお姉さんの会話から、お姉さんもきつと怪物……鬼ではないかと判断した。

最初の鬼を追い払った彼女に食べられるかと思いましたが、しかし、その予想は裏切られ私は彼女に手厚く介抱されました。

最初の頃は、何か魂胆があると思っていました。

しかし、いくら待っても、いくら探りを入れても彼女は何もして来ず、私に悪意を持っているかを掴めませんでした。

それどころか彼女は無防備だった。それに隠し事が下手で何か私に隠していることはすぐにわかった。

あの屋敷の奥の方にある小さな中庭。

掃除と称して彼女の真意を知るべく屋敷を探っていた私はある2つの墓を見つけた。

1つが誰の墓かは分からなかった。ただ、もう1つは直ぐに分かった。墓に添えられた髪飾り、それだけで私はそれが誰の墓なのかを察した。

そして、ごく稀に彼女がその墓の前で苦しんでいることも。私は知っている。

それから下手に隠された証拠や夜な夜なの彼女の懺悔や寝言、これだけあれば真相は明らかだった。彼女が、何を思っただけ私を助けてくれたのか、何でそこまで苦しんでいるのか。

「どうして知って……いや、それを知ってなおどうして！」

「……だって」

姉を殺したのはお姉さんかもしれない。しかし仇を取ってくれたのもこの人だった。

「あり：が：とう」

「志保さん!!」

「姉の仇を：私を助けてくれて……」

「嫌……そんな……!」

もう彼女は動かなかった。私は彼女をそつと地に置いた。

「何なんだよ……お前らは……そのガキも鬼のお前も、何なんだよ!!」
柱が何か言っている。しかし、知ったことではない。

「ぐ、ぐあああああ!!」

私は男に向かい突っ込んだ。しかし、腕もなく、武器もなければ血鬼術もない私に勝てるはずもない。呆気なく首を斬られた。しかし、それで良かった。

「もう迷わない……もし次があれば……」

町の事を調べてたらどんでもないことになりました。

またあそこに戻るのかな？ いや、例えば戻ったとしても私は何度でもあの場を切り抜けて見せる。

さあ!! 来い!

なんて、意識を取り戻し思いながら目を開けるとそこはいつものあの悪夢ではなく私の館の前でした。

「ど、どういふこと・・・」

復活地点が変わった？ いや、この能力がそんな都合の良いものはずがない。この死に戻りはあの悪夢を長く生き残れば残るほど過去へと戻るもの。

つまり、本来死ぬべきあの悪夢をしのぎ、長らく普通に暮らしていた期間があったためあの悪夢の場面より更に過去へと飛ばされたのであろう。

「てか、もしかして丁度私はこの辺りに来てたんだ」

つまり、無惨様は無造作に放り出したのでなくちゃんと元いた所に帰してくれてた？
ごめんなさい無惨様!!? (※2話)

さて、どうにか戻って？来たのですがここはあの召集からどれくらい前の話なので
しょうか？

幸い無惨様に解放されてここに来た日の日付はあのと盗賊達に聞いているのであ
とは今がいつなのかさえ分ければ予想はできます。

そして、私が無惨様に呼ばれるその日こそが運命の日、私の命もそうですが志保さん
の家が襲われる日のはずです。

ふと頭に不安が過る。無惨様のパワハラから生き残れるのかもそうだが、果たしてど
こまで未来を変えられるのか。私は自分も顔をパン！と叩くと気合いを入れて館へ
と入る。

やることは沢山ある。

「4日目ですか……。いつになればその時はくるのでしょうか？」

改築が進む館の奥、私の書斎と決めた部屋で私はこれまでの作業の記録と今分かっている情報を整理する為にまとめていた。

「まずは館の改築は進行中……。土傀儡達に単純作業は任せてるから後で”最後の仕上げ”をしないかね。」

館の改築と平行して実はここから少し離れた岩山に秘密の牢獄とダミーの砦を作っている。

牢獄は食料の保管が目的で、砦は牢獄の警備兼この目眩ましです。

あの日、どういう訳かこの町に柱が表れていました。彼らが出てくると言うことは何か鬼絡みの事件や情報があったからに違いないです。

すると最有力なのは私ですよ。一応は十二鬼月ですしね。けれども転生してから私はあまり目立つ事をしていませんでした。なのに柱がいた。つまりは、私が理由でない可能性も否定はできません。

なので、私は唯一心当たりのある犯罪者の誘拐を初めました。もしこれが原因で私が

突き止められるのであれば私のダミーの砦に鬼狩りか柱がやって来るはずですよ。まずはそれで様子見です。

町中にすでに虫やトカゲの形をした傀儡達が怪しい人影がないかを探っています。もしこのまま見当たらなければ直接町に行ってみたいと思っています。

「……それにしても、あの盗賊達がいらない。この町のならず者つてわけではないのでしょうか？」

日が暮れて夜になった辺りに私は町へと降りて行きました。顔はなるべく隠し、手には質素な器がいくつか入った籠を持っています。

少し前まで、正確には死ぬ前まではたまに来ていた道なのでこの夜の賑わいが少しだけ懐かしく思えます。

屋台が多く出ている所を彷徨っていると少し先の屋台からガツシヤーンと大きな音

が鳴り響きます。

「お客さん！大丈夫かい!？」

「お、おう：すまないオヤジ、皿を割っちゃまった……」

「それは気にしないが……困ったな……器がねえと商売にならん。丁度今切らしてるしよ……」

お？思った通りです。

「あの……よければこちらを……」

「うん？何だねえちゃん？皿売りか？」

「はい、よろしければこちらの価格で……」

私は指で価格を表示した。確か志保さんから聞いた相場よりかなり安くしたつもりですがどうでしょうか？

「おおっ!!そんなもんでいいんか？ならその籠の全部貰うぞ！」

「まいど〜♪」

私は屋台の店主からお代を貰った。

「この辺りの屋台はお酒も出しているので酔ったお客様がたまに割るって聞きましたけど本当ですよのね？」

この話も志保さんから聞いたのです。だから小遣い稼ぎ兼町の人との会話の糸口に思ったのですが成功ですね。

「ああ、そうなんだよな。特に今日なんてうちが全部おじゃんですよ！だから助かったぞ」店主のオヤジは私と話ながらも手を動かしている。

「今日だけでお店のお皿が全部？よくあることですか？」

「うんにゃ！こんなのそうそうねえぞ。今日は何か変なのが数人来てよ、ソイツら、食ってる途中に誰かに呼ばれてよ慌てて行くんで落としかつたんだ。」

「ふーん？その変な人達ってどう変だったの？」

「刀を引つ提げてよ、黒い装束で背に滅って字を入れてる奴らだった。ありや政府の何かか？」

「さ、さあ？何者でしょうねその人たちは？」

間違いない。鬼狩り……鬼殺隊の隊士だと思う。あれ？店主の話からするとあの柱の男ではなく普通の隊士、それも小隊規模の可能性がある。

「ほれ、あがれよ」

「え？熱っ!？」

店主のオヤジが私に熱々の蕎麦が入った器を渡してきました。

「ねえちゃんのおかげで今日はまだ稼げるからよ。食ってくれよ」

「はあ……いただきます」

蕎麦は悪くなかった。ただ、鬼なので食べても空腹が満たされないと予想外の事態に味を感じられなかったので空気を嚙るようでした。

持ってきた物が全部売れたのもう帰ることにした。オヤジにお礼を言って帰路につくと意識を傀儡達に向けてみた。

鬼狩り達の姿を確認することができた。そこそこの人数がいるみたいですね。そう言えば前にも志保さんを襲っていた鬼がいましたが、あれの為と言うわけではないですよね？

「私がここに来る前のこの町に……一体何があったの？調べるが増えたかもです……」

館のある町外れへと向かっている最中でした。館周辺を警備している傀儡からの何かの集団がこの近くを進んでいることが分かりました。あれは……鬼狩りの小隊？

まさか私の館へと向かっているのではと危機を感じましたが、どうやら違うみたいですよ。何やら大きなモノを運んでいるみたいです。何だろうか？大きな布を被せられていて分からない。

うーん、誰だろうか？まあ誰でも関わらない方がいい気がしますけど……

運んでいるものとか気になりますし、万が一私の館が発見されても困りますので……

「警備兵……かかれ。」

私が呟くと小隊から少し離れた場所の地面が盛り上がり、やがて人の形となつて現れた。それが何体も表れ、小隊を遠くから徐々に囲んでいく。

「二人は必ず殺さないでね。そう言えば……情報伝達の鳥もいるかもだから……」

私は袖から粘土を取り出した。その粘土に血鬼術を使うと粘土はたちまち夜鷹へと姿を変えていった。

「この辺りの鳥は全て根絶やしにして」

それだけ言ううと夜鷹は音もなく飛び去っていく。

「はあ……本当はこんなことやらなくていいならしたくないなあ」

「や、やめっ……ぐおっ！」

私が着いた頃には決着はついていました。鬼狩りの小隊は壊滅。警備の傀儡兵によつてほとんど殺されており、どうにか息がある者もトドメを刺されていた。

「ひいひあああ！」

丁度最後の人が殺られようとしていました。

「あつ……こら……一人は必ず生かしてねって言ったでしょうが!! 止めて! 止めて!」
「……………」

警備兵は静かに動きを止めてこちらを向く。感情のない土人形なのに何か哀愁が漂うのは気のせいだろうか?

「な、何者だお前らは! なぜ、俺たちを襲う!」

「……ごめんなさい、知っていることに答えてください。そうすれば苦しむことはないです」

「お、お前：まさか……誰に雇われた!!誰の差し金だ!」

「雇われた?差し金?何を言ってるの?」

「惚けるな!なら何故こんなことを!野盗ごときがこれほどの戦力を揃えられるはずが……」

「ええつと……理由なら……」

私は顔を隠していた覆いを外しました。

「あなた方が鬼狩りで、私が鬼だから……では理由になりませんか?」

「な、なん、だと……」

何をこんなに驚いているかなこの人は……

「や、やはりあの情報は正しかったのか……お前!どこの奴らと手を組んでいるんだ!」
「はあ?雇われたの次は手を組んだ?あの!言いたいことがさっぱり分からないのですか?それに聞きたいのはこっちの方で……」

「惚けるな!お前から鬼とこの町のどこかの商會が手を結んで何か企んでいるんだろ!!う

ぐっ……」

「ああっ！そんな怪我で叫ぶから！」

「いや、そんなことよりも、えっ？なにそれ、どういうことですか？鬼が人間と手を組んでゐるってこと？」

「なるほど……それで柱が……」

「本当はもつと聞きたいのですが、これ以上人が苦しむ様は見たくないです……やって」

「……」

「バシッ！ビシヤ」

「この町……たまたまなのかは知りませんが、これ以上人が苦しむ様は見てたくないので何かありそうですね。これは本気で調べないとね。まあその前に……」

「死体を回収して館へ！あつ！隊服は捨てないで集めておいてね」

「……ペーり」

「傀儡達は了解と合図すると一斉に動きはじめました。」

「さてと、あとはこの人達が運んでいたこれですが？」

まあ……何となくと言いますが、心配でもう中身はわかりませんがね。しかし、だとしたら厄介なモノを運んでくれたなど恨みたくありませんね。その人達はもう死んでますけど……

「……はあ。開けて見えますか。」

□

どうして、こうなったのだろう。あの日からずっと思い続けている間です。

ことの発端は村で体の異常を起こした人が出たことが始まりでした。一人ではなく複数人同じ様に苦しむ人が出たことから病ではないかと思っていました。

村には医者はおらず原因不明のまま彼らを介抱していた時です。ある男が突然介抱

していた女性を噛み殺したのです。それからあつという間に、村は人を襲う者と襲われる者に別れる地獄の様な有り様になりました。

程なくして私も謎の苦しみに襲われ体の変化を感じとりました。体が熱く、そしてとてももない飢餓感に苛まれました。

私も他の人同様に人を襲いたくて、食べたくて堪りませんでした。しかし、それ以上にそれを行うことが恐くて私は飢餓を押しえながらひたすら誰かが誰かを殺す惨状を隠れて聞いていました。

そんな地獄に彼らはまるで見計らったかのようにやって来ました。警察とも兵隊とも似つかない武装した集団でした。彼らは村人を斬殺していきました。

辛うじて生き残ったのは私のように抵抗しなかったわずかな生き残りだけでした。

「隊長！生き残りはこれだけです！」

「生き残りだ？馬鹿者！コイツらはもう手遅れではないか！」

「は、はい。それにしても、ここまで大規模な鬼化が起きるとは……」

「うむ、この辺りに奴が何か隠しているとの情報で来て見ればこの様だ。」

「では、この村は……我々から目を反らす為の？」

「だろ？、そしてそのせいでここに助けに来るか判断が遅くなっちゃったとは……不甲斐ない」

「それで？この生き……鬼どもはどうしますか？」

「醜い鬼とは言え、元は無実の村人達だ。そのまま殺すのは忍びない。せめて、意味のある死を……人の為に、我らの為に役に立って死んだ方が良いだろう」

「はっ！では山送りにします！」

男達の話は私は黙って聞いていた。そしてそのまま手足を鎖に繋がれて檻に閉じ込められても私は黙っていました。

状況が整理出来ずにいました。どうしてこうなつたと問続けました。いや、本当に聞きたかったのはそうではありませんね。本当はどうして助けてくれなかつたと男達に聞きたかつたのかもしれませんが。

何か理由を知っていた。近くにいたにも関わらず来てくれず結果村人は誰も助からなかつた。何もしなかつた私が言えた道理ではありません。ですがなぜすぐに来てくれなかつたのか？

そして、何故私達がこんなに目に会わなければいけないのですか？私は何も知らないし何もしていない。おそらく生き残った他の人もそうです。

それなのに私達は鬼と言われこの様に捕まり、意味のある死などと言われて彼らにどのように使われようとしている。

何故です？何故私達が罪人のような扱いを？どうして私達を助けてくれないの？せめて、どうしてあの場で殺してくれなかったのです？

何も分からない不明や恐怖、そして男達からの理不尽な死の宣告で私の中は怒りで一杯でした。

でも、もう：いいです。このまま生きたつてもう何もありませんし、どうせ考えたつて無駄に終わるだろうから。疲労や飢餓でろくな思考もできなくなってきました。

光の無い暗い闇の中、鎖に繋がれ考える事や意識を放棄していた私は外の異変に気付いた。

金属音や悲鳴、まるで戦っているかのような……

しばらくして音が止むと今度はこの檻の回りの壁に何か音がする。外から開けようとしているのだろうか？

誰が、何の為に？

ああ、目的地についたから処刑通告？

半分は怯え、もう半分は諦めた心で虚ろに目を開いた。

壁が壊され、気付くと檻までもが破壊されていた。そしてじつと私を見つめるのは着物姿の綺麗な女性。

その人からは私と同じ雰囲気を感じました。そして、その目は悲しんでいるような怒っているような気がしました。

「もう……大丈夫だよ……」

彼女はそつと私を抱き締めてくれました。そこからの私の記憶はありませんでした。

□

「気を失ったかな？それにしても、鬼だからってこんな少女を鎖までして拘束するなんて何て酷い人達なの？」

私は少女の手足の拘束を取ると彼女を優しく抱き抱えました。少し悩みましたが私はそのまま彼女を連れて館へと帰りました。

サブヒロイン登場？けれど悩みは尽きません。

襖の隙間から月光が差し込んでいた。

少女は静かに目を開いた。

彼女は布団に寝かされていました。その布団自体は館に放置されていた安物であったが、極度の疲労と布団がかなり久しぶりの彼女には極上の心地好きでした。

なのでもう少しだけこの心地を楽しみたいと思いい目を閉じかけましたが、流石に二度寝はと踏みとどまる。

とりあえず、状況が掴めないものでゆつくりと興起き上がろうとするが布団が重くて動けません。

何事かと思いい首を持ち上げて視線を布団の端に向ける。すると、布団に寄りかかって

眠っている女性がいました。

綺麗な黒髪に白い髪飾りの女性、確か意識を失う前に最後に会った人のような……

「うう〜」

私が動いたのに気が付いたのか女性が起きた。

「ふえ〜?あつ起きてたの?」

眠たそうに目を擦る女性。ゆっくりと起き上がると近くに用意していた茶碗を渡してきました。

「とりあえずそれ飲んでくれるかしら?」

なんだろう……この液体……薄暗いのでよく分からない。水ではないようだし少し嫌な匂いがあります。けれどよく分かりませんが私は無性にこれが飲みたいと思いました。

私はその液体を一気に飲み干しました。すると、体の疲労や飢餓感が和らぎ、心なしか心地好いと思いました。

それと同時にこれが何なのかがわかりました。

「ひい!？」

私は思わず茶碗を投げてしまった。

「あら？お気に召さなかった？」

「だ、だって！それは！」

「人の血……それがどうかしましたか？」

「それがって!!だって血ですよ!どうしてそんなものを！」

「あら?もしかしてあなたは鬼に成り立てかしら？」

「鬼……あ、あなた……も、もしかして……」

「ご想像通り：私は鬼って呼ばれる存在、そして、あなたもそうよ」

あの男達が私達を鬼と呼んでいた。体の違和感や血を飲んだ感覚……どうやら私は本当に人間ではなくなつたようだ。

「わ、私は一体……」

「分からないことだらけって感じかしら?その気持ちは痛いほど分かるけど、私はあな

たに2つ確認しなきゃいけないことがあるの」

「なんででしょう?」

「まず一つは、あなた、これまでに人を食べたことがあるの:」

「いいえ!!食べてません!私は人を一人も襲ってません!!」

「わ、わかったから落ち着いて!」

「あつ!す、すいません:」

「う、うん。その様子だと2つ目は聞く必要なさそうだね。あなたはこれから人を襲うつもりはなさそうだし」

「あの: : :聞きたいことが: : :」

「まあまあ: : :知りたいことなら分かる限り教えるから。でも今夜はここまで。」
そう言うのと彼女は部屋から出ていこうとしました。

「一つだけ: : :今教えて下さい: : :どうして私を助けたのですか?」

彼女は立ち止まり、ふと考えて困った様に笑いながら答えてくれました。

「さあ?それは私も分からないかも」

□

私は書斎に入ると自分の布団へとダイブした。

「はあく。まくたやってしまったかも？」

鬼殺隊の小隊を全滅されたこともそうだけど、どうして知りもしない鬼を助けてしまったのだろうか？

「まあ？あの子自体は察するに鬼に成り立てで？あんまり脅威ではないから最終選別の会場の山にでも連れてつてあくまで利用するつもりなのだろうけど」

あんな少女をそんな扱いをするような奴らなら殺しても文句はないよね？

まあ？全滅の件なら差ほど問題にはならないと思う。してもしなくても柱はこの町にやってくる。

それに来るのならばダミーへの誘導に利用すればいいだけのことだからこれでプラマイゼロ！

更に！人間と鬼が手を組んでいて鬼殺隊が調査をしていると言う貴重な情報も得た。

むしろ、事はプラスに運んでいると言っても過言ではない。

そんな事よりもむしろ：：問題はこれからです。

私は、あの子をどうすればよいのだろうか？ううん、実はもう考えはまとまっているの。それを、彼女が受け入れてくれるかどうか……

次の日、私は彼女の所に行った。容態を見るのもそうだけど私から提案があったからです。

「提案……？」

「そう、もし貴女がよければ……私の所で働かない？」

私は彼女を保護することに決めていた。この子と志保さんが重なって見えたからかもしれない。

けれど、これから志保さんを助けると決めた私が目の前のこの子を助けられないようでは彼女を助けるのは無理だと自分で言っている気がしました。

だから助けたい。それに、今は味方が欲しいです。

「私がここで働く……?」

「と言っても今の私が保証できるのはまともな寝床と当面の食事くらいかな。」

彼女が食事の単語にびくつとなった。おそらく昨日の事を思い出したのだろう。

彼女はじつくりと考えてくれている。

「私なんかでいいの……?」

「貴女が良いのです」

だって、ヒトを無闇に襲わない事を確約できる子でないと今後志保さんを保護する時に困りますしね。

「分かりました：アナタにお仕えます」

「本当に!？」

「え、はい：」

「それじゃあよろしくね♪」

「はい、よろしくお願い：えっ？あのなにを？」

「いいからちよつとおいで！」

「え、いや！どこにいくのですか!!」

えっ？ここは：お風呂？綺麗にしたいから？はい、分かりました：なら遠慮なく：ちよ！なんで脱がせるの!?!じ、自分でやりますから！ええ！私に任せなさいって？そ、そんな！駄目ですううう！

そんなこんなで1時間後……

「あらやだ……」

思わず口に出た感想です。

ぼろ服と汚れから解放された彼女は顔立ちが綺麗と可愛いのに丁度中間、瑞々しい美女でした。

髪も綺麗に洗いましたが先ほどまで黒ぼかったのになんとそれは全て汚れで下からは色の薄い：少し蒼い髪が出てました。

「あ、あの：：：何か変ですか？」

「えっ？いやいや！あまりにも綺麗だったからついに！」

志保さんの時もそうだったけど、どうして私の回りの美少女達は皆汚れた状況なの！？

「綺麗な!?!私ですか？」

「うん、とつても！」

「で、でも私は普通の百姓の娘ですよ？」

「貴女が普通ならその村の人が皆美形なのか、それとも変な性癖な人が多いんですよ

きつとー!」

まあ、美人の定義って時代ごとに違うから一概には否定はできませんがね。

「あ、あの……服は?」

「あつ! そう言えばぼろぼろだったから捨てたんだつ! なら……ちよつと誰か!」

「……」

私が呼ぶと土傀儡の一体がやって来た。てか、この子は常に哀愁を漂わせる謎の個体です。そう言えば、私が呼ぶといつもこの個体が真っ先に来るような気が?

「私の作品部屋から一番端にある奴を持ってきて」

「……」

土傀儡は頷くと早速出ていく。

「あの……作品って?」

「むふふふふふ♪」

□

「あの……この服はなんですか？」

「えっ？メイド服：正確には大正ロマン風のメイド服だよ？」

「な、なんだか私には勿体無いような……」

「大丈夫、おんなじの何着も作ってるから、作業着にしていよいよ！」

「あの……貴女様は服屋さんですか？」

「ううん、どちらかと言えば陶芸家かな？」

「え、じゃあこの服は……」

「聞かないでくれるかしら？」

「えっ？でも……はい……」

言えない……暇過ぎて、あまりにも暇で志保さんに会えた時の事を妄想してそして、彼女にこんなを着せたら可愛いだろうなとか思ってたらしいの間にか数十種類ものコスプレ服を作ってたなんて……

「ごほんっ……さてと、それでは貴女に最初のお願ひがあります……」

「それは一体……」ごくり

「まずは……自己紹介からお願いします！」

「あ……あつ！あくそう言えばまだアナタのお名前すら聞いてませんでしたね、恩人なの……」

「じゃあ言い出しつペなので私から、私は白亜と言います。一応この館の主で十二鬼月の下弦やってます」

「わ、私は砂夜と言います、今後ともよろしくお願いいたします白亜様。」

「砂夜ちゃんつて言うのね。良い名前ですね。」

「白亜様こそ：名前を体現した様なお姿ですよ?」

「も、もう砂夜ちゃんたら！ほ、誉めても何もでないわよ!」

と言いつつも私は血鬼術でお猪口サイズの器と小さな刃物を作り出す。

私は刃物で自分の指の先を小さく切りました。

「白亜様!?!」

「まあ待ってて」

指先から少し血が流れてきました。それを器に少し入れると私はその器を砂夜ちゃんに渡しました。

「悪いんだけど、それを飲み干してくれない?」

「こ、これは白亜様の血ですよね?」

「うん、まあくなんと言うか・従属の儀式みたいなやつかな?」

別に違わなくはないと思う。だって、同じ下弦の鬼の累君も同じことしてたし。

多分だけど鬼の配下を持ったり、力を与えたりするのは累君がセーフだったから私がやっても無惨様の逆鱗には触れないとは思いますがね。大丈夫だよな?」

でも、彼女にはできれば死んで欲しくないし、これからもしかすると危険に彼女を巻き込むかもだから少しでも自衛をできるようにしなきゃね。

「分かりました……では」

彼女は私の言葉を信じて血を飲んでくれました。すると、彼女は震え出し器は落として割れてしまった。

「砂夜ちゃん!!」

「だ、大丈夫です……でも何だか体に違和感が……」

「ご、ごめんなさい!実は私の血を飲むと鬼である貴女は少し強くなるの!」

「は、白亜様に、その……ような力が……?」

「まあ……一応、あのお方に従う最強の鬼の一人だから?」

他の下弦は（壹以外）死んだから多分最弱だけどね。

「あのお方：？それに十二鬼月って？」

「まあ……力の事とか、鬼についてとかは私が知る限りの事は教えるよ。昨日約束したしね。」

私は変化が落ち着いた頃を見計らって彼女に私が知る限りの事を伝えました。

鬼のこと、無惨様のこと、血鬼術のこと、十二鬼月のこと、そして、鬼殺隊の事を。

変わりに、私は彼女の事を聞いた。山奥の小さな農村の生まれのこと、ある日村人達
が鬼になったこと、そして、鬼殺隊が村に来たことを。

「生き残りは私と数人だけでした。それで……」

「もういいわ、ありがとう。」

彼女の話で大体の構図が分かった。

人を鬼にできるのは無惨様だけ。そして、アニメでも無惨様は隠し事や逃げる時には
わざと騒ぎを起こすって言ってたはずです。

つまり、その近くにたまたま無惨様関係の何かがあつて、それを探りに鬼殺隊が来て

たから目眩ましに村に、おそらくは飲み水とかに血を入れたんだ。例えば、井戸に血を数滴とかね。

彼女からは成り立ての鬼で人を食べてないから力や鬼らしさを感じられないと思っただけで、おそらくは少量しか取り込んでないからだろうと思う。

それなら悪いのは無惨様です。けれども、鬼だからと言って被害者でもある彼女ら生き残りの扱いに関してはとても赦せない。

「やっぱりアイツらは殺しても良かったんだ：」

「白亜様……泣いてます？」

「うん多分ね、貴女の話聞いて悲しくなつて来たんだ……」

またこのパターンだね。

確かにこの子に酷い扱いをした鬼殺隊は憎いし彼女も彼らを憎んでいる。しかし、元々も原因は無惨様であつて私はその方に従わざるを得ない立場です。

志保さんをこれから苦しめるのもおそらくは鬼です。そして、砂夜ちゃんを苦しめた人のサイドに私はいる。

何と言いますか……

歯痒いですね。

「そうです!白亜様、私が強くなったということは、私も血鬼術を使えるのですか?」
「……えっ?うん、多分?」

話題を変えようと砂夜ちやんが手をぱんとさせる。確かに、血を飲ませて力を与えるシーンがアニメにあつたからやつたけど。

たしか……累君の家族たちは蜘蛛とか糸にちなんでいたから多分この子も私に似た能力になるのかな?

と言うことで実験を試してみようと思い一応傀儡用に用意していた土を持って来させた。
た。

「では……早速やってみます……」

彼女が集中する。おおっ!?土が盛り上がっていく!どうやらこの子も土に関するものようです。

さーて、どうなるのかな……

「えっ？こ、これは……！」

もしかすると転生後一番楽しい朝かもしれない

この館には大きな厨房がある。館の改修で使えるようになってはいたが白亜は料理をしない（できない）為に長らく主不在が続いていた。

それがなんと、今朝久しぶりに火が灯つてた。

厨房に立つのは白亜の趣味で作られた和風メイド服の上に白い割烹着の格好をした砂夜。

彼女は無言のまま、慣れた手つき調理を進めていた。火が掛けられた鍋の蓋の立てる音、砂夜の包丁が食材を刻む音のみが静かに響いていた。

厨房の扉が開いたのはそんな時だった。

「わ〜♪いい匂い〜♪」

入ってきたのは白亜だった。今起きてきたのか髪が乱れていた。

「あ！白亜様、おはようございます♪」

「おはよう砂夜ちゃん、割烹着似合ってるね〜」

「はい！白亜様が昨日作って下さったこれ、とても着心地がいいです！」

「あれ？砂夜ちゃん一人？手伝い用に土傀儡数体用意してたのに！」

「それならできたご飯を食卓に並べて貰ってますよ。後はこの味噌汁だけだったので白亜様をお待ちしておりました。」

「ありや！待たせちゃった？」

「いえいえ！白亜様が私の割烹着の後にも作業なされたので寝るのは遅くなったのは知っていますので！」

「ううっ…砂夜ちゃんまじ天使です…」

砂夜に促されて食卓を用意している部屋へと向かう。食事の部屋は厨房の隣の部屋でもよかつたけどせっかくなので少し広めの所をチョイスしている。

部屋の前には手伝いをしていた土傀儡達が座して待っていた。

「(ト)はもういいよ、下がってて。」

「……」

傀儡達は指示を受けるとぞろぞろと移動を始める。命令がないと動かなくなるのが可愛いところでもあるが手間のかかるところだと思う。

人払い（土払い？）を済ませて部屋の戸を開けるとずっと二人を待っていた者がムツとこちらを向く。その顔は砂夜ちゃんと瓜二つで……

「遅いですよ二人とも」

「ごめんなさい、お味噌汁でできるのに少しかかっちゃった」

「いいえ、砂夜は悪くないわ。砂夜は出来立てを作る為に待ってたんですもの。悪いのは寝坊した白亜様よ。」

「ちよつと砂生！」

「いや最もだからいいよ。おはよう砂生ちゃん」

「おはようございます白亜様、さあ私の指示で並べた朝食が冷めないうちに」
「作ったのは砂夜ちゃんだよね？」

「失礼ですよ！私も手伝ってますよ！」

「ええ砂生も手伝ってくれますよ」

「へ、へえー。じゃあ砂生ちゃんはどれを作ったの？」

「お米を炊きました！あとは火の番も！」

「お、おう……」

ま、まあ。昔のやり方で釜でやるなら大変なんだろうねきつと！

「よくやったね、よしよし」

「どやー！」

撫でられてここまでや顔するとは、しかも砂夜ちゃんの顔でそれをされるとなんか新鮮でいいかも。

「あ、あの！本当に冷めますので早く食べてしましましょう！」

「本当は自分もナデなれたいんですよあの子。後でやってあげて下さいませ」

「勿論、喜んで」

「も、もう〜！」

この砂夜ちゃんと写し鏡みたいな子は砂生ちゃん。簡単に説明すると砂夜ちゃんの血鬼術で生まれた土傀儡です。見た目はまんま砂夜ちゃんですが、髪が材料の土の成分の色が出ていて赤っぽくなっている。

彼女に血鬼術を使ってみせて、人形の物ができたまでは私のモノと同じなだけで、どうやっても彼女は自分の姿をした傀儡しか産み出すことができませんでした。

そして、この傀儡はなんと自我を持ち、話すことや完全自立行動ができると言うまるで私の血鬼術の上位互換みたいなことになりました。

彼女の血鬼術は自分と同じ姿の傀儡を作ることのみで、私みたいに地形操作や土錬成はできませんでした。しかし、この傀儡は自立思考のみではなく：

「あつーこのたくあん切つておいてと頼むの忘れてました……ちよつと包丁で切つてきます」

「砂夜、少し待って」

立ち上がろうとした砂夜を制した砂生は手を広げて意識すると、そこから包丁サイズの刃物を生成した。

「はい」

「ありがとう」

砂夜はそれを受け取り布で綺麗に拭くとたくあんを切り始める。

そう、彼女は使えない土錬成を彼女の傀儡が使えるのです。ただし、私みたいな細かいことは出来ず、作れるのは片手サイズのシンプルな形状の物のみです。

ちなみに砂生は砂夜ちゃんが付けた名前で砂から生まれたからだそうです。

「はい白亜様」

砂夜ちゃんがご飯をよそいだ茶碗をくれた。

「あつ。ありがとう。それじゃあ……いただきます！」

「い、いただきます……」

「私は土だから遠慮するわね。おかわりがあればまかせなさい！」

「うん！それにしても……うん！美味しいです。砂夜ちゃんは料理上手ですね。」

「え?!あ、ありがとうございます！」

「あれ?砂夜、何だか照れてますよ?」

「本当ですね。砂夜ちゃんは照れても可愛い〜」

「もう!止めて下さいませ!」

砂夜は更に照れ臭そうに顔を赤める。すると話題を変えたい砂夜はふと思った事を尋ねた。

「しかし白亜様、どうして最初の命令がご飯を作ったのですか?昨日の説明だと私達は食事は不要だと……」

「ああ……それはですね……」

まあ、一番の理由は志保さんかな？彼女と一緒に生活した1ヶ月のおかげもあってこの世界に転生してからも普通の食生活をしていたわけだしね。なんだか、無いと落ち着かないと言うかね？

それに……

「うーん、まあ？いくら鬼になつたからと言ってわざわざ怪物らしくする必要もないかなんて。たとえば怪物だとしてもわざわざ人間らしさは捨てたくはないからね。」

「えっ……」

私の発言に砂夜は目を丸くしてこちらを見ている。

「あれれ？私、何か変なこと言ったかな？」

「いいえ！とても素晴らしい考えだと思います！ねえ砂生！」

「元々生物ですらない私にそれを聞くのはどうかしていると思うけど、私もその考えは嫌いではないわ。」

「えーそうかな？二人に言われるとなんか照れる〜」

「あつ！白亜様も照れてますね。」

「白亜様もお可愛いですよ？」

「……ごめんなさい、謝るからもう止めて……」

私は思わず顔を手で覆う。それを見て砂夜は微笑み、砂生は笑い出した。これには私も話題を変えようといった疑問を口にする。

「本当に砂生ちゃんは傀儡には見えないよね。こうして普通に会話してても違和感ないし」

「ふん！凄いでしよう！」

「私の土傀儡達みんな無機質だからなく。もしかすると砂夜って天才？」

「まあ、傀儡の私が言うのもなんだけど、一から個性を作るのは神にも等しいわね。もちろん、いくら白亜様から力を貰ったとは言え鬼として半人前の砂夜じゃ無理だわ。」

「え？でも実際に貴女を作ってみせてるけど？」

「私のは一からと言うよりは彼女の複製よね。ほら、見た目同じでしょ？」

「うん。そうだね。」

「彼女、白亜様みたいに想像力とかなから人形を作る際にイメージできたのが自分だけなのよ。それで、自分をイメージしてやっていたら割と細かく作れて性格とか記憶とかも再現したわけ。」

「ええ？でも性格とかかなり違うけど……？」

「ふふふ♪実はこの子、昔はこんな性格……」

「うわー!!うわー!!止めて!お願いだから!」

…なるほど。つまり、自我を与えるなら姿を与える際に一緒にやらなければいけないのか。姿を想像して作るのは簡単でも、その中身と言いか見えない部分あたる自我も一緒に考える必要があるから…

となると確かにイメージしないといけない領域が増えるからハードルが高いね。

でも、それを自分自身のイメージとは言え一発でやってのけた彼女はやはり天才なのでは?

「ちなみに彼女は一体作るのに手一杯なので事実私しか作れませんよ」

「うう…:ぐうの音も出ない…:」

「いくやでも、今の話は参考になったかも。ありがとう。」

「お礼ならこの後砂夜をたっぷりと撫でて返して下さいな」

「ちよつと!またそこに戻るの!?!」

「喜んで!」

「白亜様も悪乗りしないで下さい!さあ!まだまだおかわりもありますので召し上がって下さいよー!」

「はあく楽しかったな〜」

久しぶりの賑やかな食事だった。志保さんがいた時は二人だけだったからね。もしかすると転生後一番賑やかだったかもね。

食後はもちろん、砂夜ちゃんを撫でて愛でてをしたりと大変楽しめました。

そのあとは、砂夜ちゃんは家事をやるからと気合いを入れてたし、砂生ちゃんは同じ傀儡だからか知らないけど私と同じように他の傀儡達からの情報を受けとることができるといだから私の変わりに町にいる傀儡達からの報告を受けとってもらってる。

いちいち傀儡の視界を借りたり、文字だけの思念みたいな送られるのは中々キツイからね。

「やることないし、今朝教えて貰った事を踏まえて新しい傀儡を作ってみるか……」

とは言えども……今朝の為に新しく土傀儡をたくさん作ったので手頃な土が余って

ないかも。

「はあ……どうしたものか……ん？」

悩みながら書斎に戻っていると書斎の前に待機していた土傀儡が目に入った。よく側にいるあの謎の哀愁が漂う個体です。

「たくさん触った方がより力を発揮しやすい……」

「……」

私はその個体をじーと見つめた。

「……よし。」

私はその子をガシツと掴むと書斎の中へと連れ込んだ。

動く陰謀、そして迫られる第二の決断

白亜達が潜伏するこの町は商業が盛んで商人達が強い力を持つ土地柄でもある。その為か、首都や大都市に比べて小さな町ながらも異様な発展、賑わいを見せている。

そんな町の某所にて、白亜達が朝食を楽しんでいる頃……

どこかの倉庫：地下室かもしれないどこか暗い場所で蠟燭の灯りだけで彼らはいた。

「フム：鬼殺隊どももようやく動き出したか。相変わらずの動きの悪さだな。……まあ精々頑張つて探つてくれるといいよ。その方が都合がいいからな。」

「お、お前！本当に計画の方は大丈夫なんだろうなっ！」

「何を今さら……」

蠟燭だけで顔は見えないが声の震え、息づかいだけで前にいる男が不安がっているのが手に取るようにわかる。

（これで長年続く名家の主なのだから……肝が座つてない。これだから野心だけ高い

七光りが：)

「いよいよ計画の実行を前に：まさか奮つてのかな?」

「はあ!?!：お、おうとも!まさに武者震いつてやつだ!」

(その上見栄っ張りか：：バレバレだぞ?)

「し、しかし!大事をやるからこそ慎重になるのは、ととと当然だろ!」

「はあ：：いや、それはその通りだが：俺の計画はほぼ予定通りですよ。その証拠にまんまと噂に釣られた雑魚どもが集まつてるし、そちらでも何匹か捕らえさせてるが?」

「う、うむ!しつかり捕らえてある。あのままでいいのだな?」

「ええ、餌を与えずそのまま暴れさせて下さい。クッククク：当日役に立ちますから：」

「こちらの人選などは済んでいる。そろそろ下準備に入る：：がっお前はどうか?高い金を払って用意してやったんだ。」

「ええ：：バッチリです。これでもしも鬼殺隊が敵になっても私が：我々が駆除しますよ」

「おお!便りにしてるぞ!」

聞きたい事を聞いて安心したのか落ち着いたのか男はその空間から立ち去った。

「ふん……精々自分が利用している気になっていろ。」

「隊長……」

「お前か、なんだ？」

「鬼殺隊及び例の商家を偵察している者から報告です。どうやら我らの事を調べている者がいるようです。」

「それがどうした？ 奴等が我らを探すのは当たり前だろ？」

「いえ、それが……」

「どうした？ 早く言え」

「どうやらその者ら、鬼殺隊を監視していたようです。怪しい人影いると思ひ拘束しようしたのですが、捕まえたのはただの泥人形でした。」

「なんだそれは？ 忍が変わり身でもしたのか？」

「わかりません。しかし、もしもそうであれば手練れの忍が我らとは別に動いている可能性が……」

「ふむ……」

「隊長、やはり少し計画をずらした方が……何やら町で人がいなくなる事件も起きてますし……何か変ですよ！」

「いいや、その程度ならまだ想定範囲だ。計画は続行する。予定通り準備を整えよ！ 計

画実行は……後7日後だ!!」

「うーん!!困ったなー!」

書齋で血鬼術の実験をしていた白亜は一旦それを切り上げると改めてこれまでのまとめた情報を見ていた。

「今分かっていることで確実なのは私があのパワハラから逃れた日に志保さんの家が襲われること。」

そして、それをしたのは金目当ての盗賊だった……と思っていたけどどうやらあの一見華やかそうな町には得体の知れない陰謀があつてそれに巻き込まれる可能性が高い。

「そして、その陰謀には鬼も絡んでいて鬼殺隊が調査をしている。そして、事件後の数日後には柱もやって来る。」

そもそもこの2つを結びつけるのは少し強引だと思うけど、偶然にしては出来すぎ君何ですよね……

志保さんの家と思わしき商家は発見できた。そして、なぜか鬼殺隊が数名ずーと警備している。

そのせいで迂闊に近づけないので会いに行けてない。そもそも傀儡達に見張らせてるのに全然志保さんや志保さん姉の姿を見ない。

そして、ここ数日になって鬼らしき奴らの姿もちらほらと。まだ町の人達は誰も気付いてないけどすでに数回、鬼殺隊と小競り合いをしている。

「私が無惨様に呼ばれるだろう日まで後7日……それまでに何か手を打たないと……けれどもここまで情報がないのでは……」

こんこん

戸が叩かれる音がしたので一旦考えるのを止めた。とりあえず返事をした。考え疲れたので砂夜ちゃんだったからお茶でもいれてもらおう！

「失礼いたします白亜様……」

「なんだ砂生ちゃんか……まあいいや、砂生ちゃんお茶頼んでもいいかしら？」

「……なんだかとても失礼な気がします。今は触れないであげます。ご報告します。白亜様の言っていた例の盗賊らに人相が一致する男らを発見しました」

「それは本当ですか!!？」

その知らせに思わず立ち上がり砂生の肩を掴んでしまう。

「え？あ、はい！間違いないです！」

やりましたよ。今丁度詰まっていた所です。今は何でもいいからヒントが欲しいです。彼らが少しでもキツカケになれば……

「それで!!今どこにいるの!？」

「はい、それがですよ……この館に向かって来ております。」

「ならば話は早いです！警備兵は直ちに待機！館に着いた所を一気に捕らえて！一人も逃がしたくないから包囲網をしつかりとね！」

「承りました。それでは早速歓迎の準備をします。……ところで？」

「うん？」

「その部屋の隅で哀愁……いや寂しそうにしてる女は誰ですか？」

砂生が指したのは書斎の窓辺で独り物静に本を読んでいる眼鏡をした女の子です。

「あの子？あの子はね、今朝教えて貰った事を踏まえて作った自我を持つ土傀儡一号

ちゃんです!」

「あれが?」

「そう!一号ちゃん!」

「申し訳ありませんマスター:今いいところなので後少し読ませて下さいませ:」
そう言つて彼女は振り向きもせず本を読み続ける。

「:~:~:~:どうしてこうなつたの?」

「いや~なんか色々考え事しながらイメージしちやつてたから、知的な子ができて私を助けて欲しいな~とか知的つてどんなのだろうと色々昔見たアニメのキャラをイメージしたらこうなつたの」

「あにめ?きやら?」

「ああ~わからないよねアニメ:~:」

つまり、何が言いたいのかと言うと、知的イコール本を読んでも、物静みたいなのを連想した結果です。

「まさかすぐに習得するなんて流石は私の主人だわ。しかも一から創造できるなんて!」

「ウフフ♪もつと誉めて！」

「あの：静にしてもらえませんか？本当に後少しなので：」

「な、なんだお前達は!？」

数刻した位に男達は館にやって来た。中に入ったところで土鍊成で作った檻の罠に閉じ込めてやりました。ちなみに館周辺には数十体の警備兵が伏せてあるので逃げられませんとも。

「白亜様、ご命令通り捕らえております。」

「みんなご苦労様です。」

チラリと檻の男達を見る。顔は間違いない。あの日私が殺した人達です。しかし、一つ違いがあるとすればそれはあの盗賊風の格好ではなくどこかの奉公人のようなちゃんとした服装をしていることです。

「通りでいくら悪い人達を拉致しても見つからないわけです。元々は不良ではなくそのふりをした社会人だったんだから」

「な、なんのことだ!!」

「おい!ここから出せ!お前らは何者だ!」

「フフフ、ごめんなさな。始めましてでよろしいですよね?質問を質問で返すようですがあなた方こそ何者ですか?仮にも乙女の家勝手に勝手に入り込んで……」

「えっ?いやいやここは廃墟のはずだぞ?」

「そ、そうだ!だから今回の拠点に使えないかと思つて視察に来たんだぞ!」

「お前らは黙れ!!」

「あつ!すんません……」

ほほう……ここが廃墟と分かった上で来てたと。そして視察ね……。これから盗みに入るからその時の隠れ家として使おうとかそのあたりかしら?

実際にあの日はここで彼らはいたわけですしね。

「琥珀ちゃん(一号のこと)どう思う?」

「はい……。もはや確定かと。」

「そっか……ならばなおのこと聞かないとね？この人達の事とか知ってる事全部ね。」

そして、もしそうなら遠慮はいらないよね？

「砂夜ちゃん、砂生ちゃん。しばらくここから出て貰える？もし良かったらそのまま夕食準備に行ってくれてもいいから。」

「えっ？……はい。」

「承りました。では、お言葉に甘えて夕食の支度をします。」

二人が出ていったのを確認すると私はこの部屋の扉を地形操作で封じた。これでは私と琥珀、五人の男しかいません。

「さてと、では早速お聞かせ願いまけんか？あなた達が何を企んでるかを」

「はっ？だから何も知らないって言ってるんだろ!!」

「早くここからっ！」グサツ！

男の1人の胸に大きな刺が貫通した。それがそのまま致命的となり彼は息絶え倒れた。

「ひいひいひいひい!!??」

「な、なんだ！これはなんなんだ!!」

「お、おい！こんなことをしてどういうつも……」

グサツ！……バタツ

「はい、二人目……まだ話す気はない？これでも私も心傷付いてるんだよ？」

「だ、だから……俺達はただの盗賊でこの姿はただの……その……」

「はあ……嘘は止めて欲しいかな？」

グサツ！グサツ！……バタンっ

「残りは……また君らか」

「ひいひい！」

「お助けを！命ばかりは！」

「はい。ちゃんとお話してくれるのならば……ね？」

「助けてくれるのか!？」

「は、話す！話すから!!」

「ありがとうございます♪琥珀ちゃんメモお願い！」

「分かりました。」

リーダー達がいなくなったからなのか、助かると分かったからなのか男二人は必死に喋ってくれました。

まず彼らはこの町を拠点に商いをする『叢雲商会』と言う所で働く従業員だそうです。

この叢雲商会はこの町では一二を争い大商会で更になんとです。昔から鬼殺隊を支援している所謂スポンサー的な存在でもあるそうです。

これから更に大きくなるための絶好の機会である商談があるとのことですが、これを成功させる為にはあるライバルの存在が大きく影響しているそうです。

それこそが志保さんの実家である『白波屋』だそうです。そして、ここも鬼殺隊に財源での支援をしているようです。

なるほど、繋がりましたよ。

邪魔な白波屋を消したい叢雲商会がこの人達を使って焼き討ちを仕掛けようと企んでいる。

ただ、いくつか疑問点が残ります。

「白波屋のほど商会をたつたこれだけの人数で、今は鬼殺隊も見張りについています。どうやって事を成すつもりだったのでしょうか？」

「し、知らない！本当にだ！俺達はただその日白波屋の混乱に隙に金品と娘を拐えとだけ……」

「混乱？」

「俺らとは別に動く奴らがいてそいつらが何か騒ぎを起こすただけ……本当に知らない

んだー！」

「マスター、こんな小物にそんな重要な情報が伝えられてると思えません。」

「なるほど……これ以上は何も出てこない……か。」

いや、最後に確認したいことがある。

「あなたが襲撃の別動隊なのは分かりました。ただ、どうして娘を拐えと命令が？」

「そ、それは俺にもわからない。ただ、大旦那様からは例え死骸でも良いから連れてこいと言われている。」

「理由はまだは知らないか、そうですか。」

「これでいいんだよな！知ってることは全部話したぞ!!？」

「ええ、大変参考になりました。大変感謝しています。」

キツカケのつもりが、まさか真髓に近づくことができるとは……

「じゃ、じゃあー！」

「ええつ。あなた達には感謝しています。お礼に助けてあげるのもやぶさかではないです……。」

檻の回りに無数の刺が発生した。

「おおおオイ?! 約束が違うぞ!!」

「約束……? そんなのしたかな・琥珀ちゃん!」

「はい、『ちゃんとお話してくれるのなら……ね?』とは言ってはおりましたが具体的内容は何も言っておりません。」

「そ、そんな! ふざけんな!!」

「はい? まさか、私があなた方を許すとても? 志保さんの家を焼き、姉を殺したあなた方を? ……許せるとても!! 絶対に許さないから!!」

グサツ! グサツ! グサグサグサグサグサツ!!!

「マスター!? 落ち着いて下さいませ!」

「はっ! はあはあ……はあ……」

琥珀に止められて気が付くと檻の中にとても形容しがたい状態になっていた。

「うっ……ぐへっ……」

私は思わず吐いてしまった。そして、怒りに委せて、いくら殺してもいい相手とは言えなんて事をしてしまったのだろうか……

「二人を……退室させておいてよかった……」

「マスター……落ち着きましたか?」

「ええ……ごめんね。突然取り乱して」

「お気になさらず、それよりもマスター。大変貴重な情報を得ました。」
琥珀ちゃんの言う通りです。

これでようやく、敵の正体が掴めました。

敵は叢雲商会、そして……こと手を組んでいる鬼がいるに違いありません。

「これは探る必要がありますね。叢雲商会を」

「後鬼狩り達がどこまで掴んでいるか、それも知る必要ができました。事は予想以上の複雑そうです。」

「ええ、でもまずは……ご飯にしたいかな。」

今は少しでも癒されたい。彼女達と楽しく食事でもして……

「それは構いませんが、マスターは砂夜さんをどうするのですか？」

「それは……」

「見たところその辺りの事情はまだ説明してないようですけれども、このまま行けば間違いなく敵と衝突にあの子を巻き込むことになります。」

確かにそうだ。そして、こうした問題を先送りすると必ず後悔するのはすでに経験

済みですしね。

けれども、志保さんの件は私個人の問題、それに彼女を巻き込ませてもいいのだろうか？

「そろそろ決断をしないとね……」

運命の日前夜で不安ですが私にはこの子達がいる！

白亜の運命の日 前日

「ああ……不安だ……」

明日、私はあのお方に呼ばれる。そして、下手をすればそこで殺される。

もし無事に帰れたとしてもそれはスタートラインに過ぎない。私がない間、もしくはその前後に事は終わっている。

何が起きるのか、敵の戦力、鬼の存在すら確認が取れていない現状ではどうしても受け身になるしかない。

なので私はあれから6日の間、眠りもしないで準備を整えている。町の監視用の小動物だったり、戦闘の可能性を考えてここの警備や町に送り込む人型の製造です。

その間に私はある決断をした。

砂夜ちゃん達に私の目的を伝えたのです。私はある人間を救いたい、その為に力を借

りたいと:

意外なことに彼女は二つ返事で、

「はい!喜んで!」

と返したことに正直に驚きを隠しきれない。彼女がなぜ協力を了解してくれたのかはわかりませんが、今は詮索はしません。

二人の協力もあり、警戒網の作成やいざと言うときの防衛計画も整っています。その為に必要な傀儡や仕掛けの用意もできています。

「残す問題は、肝心の町の方ですよね……琥珀ちゃん……大丈夫かな?」

□

叢雲商会が保有する倉庫郡がある区画、その建物の影から生えるように現れたのは白亜の側近として生み出された土傀儡の琥珀。

「(トト)で最後……」

白亜の命で叢雲商会を探っていた彼女だったがここまで収穫はゼロ。何とかして情

報を獲たい所ではある。

敵は余程用心深いのだろうか、全く痕跡がないどころか、計画の存在自体知る者がいない。叢雲商会の大旦那とか言う小物なら見かけたし、なんなら直ぐに始末できそうではあったが、それで肝心の敵の方が警戒してしまつては面倒ではあるのでそれはしない。

と、思つて泳がせては見たがああ男を張つても何も出てこない。一度忍びこんで探つてみても何も出ない始末。

唯一の収穫は、この男が数日前に珍しく予定もないのにここに來ていたことのみ。なのでもしやと思ひ來てみたのですが……

「……この倉庫、かなり壁が分厚いですね……窓もありませんし、まるで外に音が漏れるのを防ぐかのようなですね。あたりかしら？」

当然、扉も頑丈で鍵も壊せそうにない。何より私は非力なのですから。

そう判断すると琥珀の体はさらさらと砂へと戻つてしまふ。そして、再び体を構築したのは倉庫の中だった。

白亜が琥珀に与えたのは自我や知性のみではなく、特異な能力も与えていた。

彼女に与えられのは、体の分解と再構築する能力。

これにより任意によって砂になることで土の中に潜ることが可能であり、かなり高い
隠密能力だと言える。

「……窓がないから当然なかは真っ暗。まあ……私は関係ないですけど。」

それよりも何ですかこの山積みの木箱は？

琥珀は近くの木箱を開けてみる。その中身は大量の商品ではなく、更にその底、抜けるようになつており開けると底には大量の鉄砲、弾薬など……

「副業で武器商人でも？ いや……本命は……」

琥珀が目をつけたのはひととき大きな木箱。その側面の方におそらく灯りがあつても気付けないような分かりにくい扉が作られてました。

琥珀は念のため用心して開けるも扉の先にあつたのは地下へと続く階段。

「まだ何かあるの？」

琥珀は階段を下りていく。階段の底には頑丈そうな扉、しかし琥珀は再び砂になつてすり抜ける。

「……何よこれ！？」

再構築を終えた琥珀が目にしたのは大量の箱。それも今度は木箱ではなく檻、それも中に入っているのは……

「ぐぬああああ!!」

「血を……血を寄越せ……」

「アアツ……アアアアア!!」

鬼だ!!それも2, 3匹どころではない。10, 20……いや50匹くらいはいる!

「どうしてコイツを捕らえてる? いや、そもそもどうしてこんなにいるのか……うん?」

奥の方に机……作業場か?

「これは……記録か? ここの奴ら、捕らえた鬼の場所と日付を記録付けてるのか?」

馬鹿なのか?

「ふむふむ、どうやらここの奴らは全てこの町で捕らえられたようだ。しかもほとんど……」

「だが、どうして殺さずに集めているのだ? そもそもどうしても鬼がこんなにこの町に集まっているの?」

「ふふ……鬼狩りを支援してる組織が鬼を集めてるなんて面白いわね。まさか、上の武器

はバレた際の目眩ましかしら?」

「いいやく? 間違つてはないがそれだけじゃあ正解はやれないぞ?」

「だ、誰!」

人がいた! 灯りが無いから人がいないと決めつけてた? いや、ちゃんと人の気配がないか探っていた。

「何を驚いてるんだ? 気配なんて経験があれば誰でも消せるだろ? : ああ、もし灯りとか人の気配とかの話ならば……!」

「っ!」

速い!? と思つた時には私の左手が無くなつていた。

「おお? なんだこの感触は? お前何者だ?」

「答える義理がありますか?」

「それもそうだな。」

何この人! いや恐らくはこの者が叢雲商会と手を組んでいる鬼か?

ならばここまです。鬼の存在を確認できた時点でこちらの目的は達成です。早く情報をマスターに……いや伝達の為に思念を伝達する暇がない。

ならば取るべき行動は……逃げる!!

「おら逃げるなよ！」

琥珀が逃げようとするのと鬼の男は得物、恐らくは刀で私の背中を斬りつけてきた。

しかし……

「おお？ 肉をごっつそりのはずが感触がやはりおかしいな？ それに斬った所が再生してる？ お前……鬼か？」

「さあ？ そちらも、ただの鬼ではないようですが、何者ですか？」

「俺をこんな獣どもと同じにするなッ!!」

鬼は激しく斬りつけてきた。琥珀も回避を試みるがほとんど避けきれない。

(この余裕のある態度……それにこの刀捌き……かなりのやり手かしら?)

「お前の体……」

「戦闘中？ に話しかけるなんて余裕……」

「砂でできてるな？ そう異形の鬼なのか、もしくは血鬼術か？」

「……さあ？」

「それにこの刀はな、鬼狩りから奪った日輪刀だ。それでこれだけやっっているのにまるで効いてない……さては体が砂なのか？ それも今までの傷は直しているのに最初に斬った腕だけがそのままだ。つまり、お前が意識して何かしてないといけない、違うか？」

よく観察してますね。悔しいですが、この男の言う通りです。私の能力は任意で体を砂にでき、それを元通りに直すこと。つまり、意識して体の一部を砂にしている時ならまだしも、通常時の破損は他の傀儡同様で自力では直せない。

「お見事ですわ」

「そして、さつきから反撃がない所を見るにお前の能力はそつちに偏っているから手段がない、だろ！」

「……はあそうです。その上逃がしてくれそうにないですしお手上げです」
そう言うと琥珀は両手を上げてみせる。

鬼の男も勝利を確信すると思っただが、こちらを警戒し刀を向けたままだった。

「用心深いですね……」

「ああ、計画失敗に成りかねない要因は潰す。」

「なら早くやってしまいなさいな」

「そうしたいがお前に聞きたいことがあってだな。」

「私の眼鏡の度でしたから無いですよ？これ伊達なので」

「いや、それはどうでもいい。最近俺達を付け回っているのはお前達か？」

「その根拠は？」

「前に部下が泥人形を捕まえたそうだな。最初は忍法かと思ったが俺は疑ってな。お前の能力を見て確信した。お前ら鬼の仕業だとな。」

「あらあなたも鬼ですよね？」

「黙れ！俺はな！いや、何でもない。それよりも誰の差し金だ？十二何とかか？それともあの方とやらか？」

「……！」

「何を驚いた顔してる？」

「えっ？いや、何でもありません。」

「ならば！」

「私から話せることはございませんが、とりあえずお礼を申し上げます」

「は？」

「いえ。追加に貴重な情報を得られたので……それではこれにて……」

「はあ!?!お前逃げられると……」

「では、最初のあなたの質問、私が何者かだけは教えます。私もあなたの言うところの泥人形です」

琥珀がそういうと全身を砂へと変えていく。

「なっ！・まで！」

倉庫郡からかなりの離れた裏路

「ふう……どうにか逃げられましたね」

本来ならあの男との戦闘などせずに逃げててもよかったけど少しでも情報が欲しいと欲を出してしまいました。

あの男、力を使わずともあの戦闘力……血鬼術しだいでは私も危なかったかもです。路地入り口から数人がやってくる。追っ手かと思っただがどうやら町人に擬態した伏兵だった。きっと心配性のマスターが寄越してくれたのだろう。

「はあく。早く帰ってマスターに腕を治して貰いましょう……うん？」

裏路のさらに奥の方、なにやら異臭と生々しい音がします。

「これは……もう少しだけ欲を出すとしましようか」

「琥珀ちゃん！それは本当!？」

会議お約束のポーズだった白亜が飛び上がる。

「はい、檻に閉じ込められた大量の鬼、そしてかなりの手練れがおりました。」

琥珀が戻ると早速作戦会議が開かれた。場所は白亜の書斎である。

「そして、血鬼術は見ることはできませんでしたが恐らくは……」

「使えてもおかしくない?？」

「はい……」

厄介です。恐らく私の能力では剣士に接近されて戦われては勝目がないです。更に異能の鬼だった場合その力がわからない以上は更に勝ち低い。

「あの……」

砂夜が恐る恐る手を上げる。

「どうしたの?？」

「いえ、大したことではないかと思いますが、どうして鬼をたくさん捕らえてるのでしようか?？」

「あつ!確かに私も気になってた。そもそも鬼がどうしてこんなにいるの?不自然だよ!」

「それについては:」

「琥珀ちゃん、何か掴んでるの?」

「はい、当事者に聞くのが速いと思い町で見かけた鬼を捕縛しました。」

「おつ!?!琥珀ちゃん偉い!天才!」

「それで何かわかったのでしょうか?」

「はい。どうやら最近ある噂が流れてるみたいで:」

「噂?」

「その噂によると、白波屋の娘が稀血、それもかなりの上物で食べるとどんな鬼でも異能を獲られると:」

「くっ:~:~:~!」

稀血:~:~:~確かに志保さんを襲ってた鬼も言っていた。稀血:~:~:~鬼:~:~:~そうか!!

「わかったわ!!」

「白亜様?」

「いかがしましたか?」

「繋がったの！今まで集めた情報が！」

娘を拐えと指示された盗賊、白波屋を守る鬼殺隊、噂とそれに集まる鬼に彼らを捕らえてる叢雲商会に謎の鬼……

「どうして叢雲商会と鬼が手を組んでいたのか……それは稀血が目当てだったのね！」

稀血の質がどうかはわからないけど、食べた私が保証する。あれはとてつもないご馳走に違いない。

叢雲商会は鬼狩りを支援している。つまり、鬼の存在を知っている訳で、白波屋の娘が稀血なのを知っていたらそれを利用してしようと考えて不思議はない。

そして、稀血を求める鬼とそれを奪うべく襲わせるどさくさ紛れ白波屋を潰したいと考える叢雲商会と利害が一致した……

そして、その時に邪魔となる鬼狩りはあえて流した稀血の話に釣られた鬼達をぶつけるつもりだ。

「鬼に手一杯になれば、人が襲ってくるなど考えてもない鬼狩りなんて出し抜くのも簡単……そういうとですね。」

「これは……予想以上ですね」

「白亜様……」

「……大丈夫、きつと……」

逆に考えるんだ。鬼狩りどもが白波屋を守れなかつた事を考えると奴らは雑魚鬼達で一杯一杯のはず。そして柱はまだいない。ならば、私達の敵は叢雲商会の刺客とその強いらしい鬼のみ……

「しかし：下手すると私がない状態でことが進むことに……」

「白亜様ご安心を！この砂夜、及ばずながら白亜様の為に力を尽くします」

「砂夜がやるなら仕方ないわ。私も頑張ります」

「私、いや私達土傀儡はマスターのご命令に従います。」

「皆……！」

そうだ！私にはこの子達がいる！そしてこの数日の成果である切り札もある！

やれる……やれる気がする！！

遂に始まってしまったよ：決戦勃発だよ！

「動いた……！」

物陰に隠れていた琥珀は右手で耳を押さえながら、視線をゆっくりと彼方へと向ける。

この町に駐屯している鬼殺隊の戦力、確認できているだけでも四つの中隊が確認できている。そのうちの大半が寝泊まりしていた施設に潜伏している兵から盗み聞いた話からすると、これから出撃するようだ。

「動いたって、まさか！」

一緒に来ていた砂生が目を変ええる。

「鬼殺隊がようやく動いたわ」

「規模は？戦力はどれくらい？」

「少なくとも二中隊が白波屋防衛に回るみたい……けれど残念ながら隊員のほとんどが雑魚……二人くらいともそうなのはいるけど柱はいない……」

「柱がないのは有難いけれども、その戦力では駄目だわ」

敵の出方を探るべく町に再び潜伏した琥珀。この後は別行動になるが用心のために砂生も付いてきてくれている。

白亜の予想で、柱はいないことになっていたがこれで確定情報になった。他に驚異になる存在がいるかが懸念ではなかったがここまで来て姿を見せないのであればいいと考えてもよいだろう。

しかし一方でそれは不味い状況でもあった。

「あの程度なら私達二人と近くの伏兵達で奇襲すれば楽勝だわ。やるなら今よ!」

「駄目よ。このまま隠れながら追尾するわ。」

「琥珀…!?!」

「私達がここで鬼殺隊に攻撃を仕掛ければ、確かに敵を殲滅できるし、なんなら叢雲の方も強襲する作戦をマスターに立案しても良かった」

琥珀は冷静に言葉を続けた。

「でも、ここであれを潰せば叢雲商会の戦力を私達が全面的に相手することになる。更に今姿を出せば私達の存在が叢雲商会に捕捉される危険がある。そうなれば、私達は撤退を強いられる。敵の存在、動きを味方に伝えることが出来なくなる。結果、敵の奇襲

を受けることになりかねない……」

「……そうね」

本来なら鬼殺隊のみで敵を防いでくれるのであればそれが一番都合が良い。しかし、あまりに柱などの脅威であればここで確実に削るのも悪くなかった。

けれども、脅威どころか予見以下に雑魚ばかり……これではマスターの言う通り彼らでは防げない。

「白亜様の予想通り……けれども……！」

「大丈夫、ここままでマスターの予想通りならこの後もそれに沿うだけよ。私達が忍耐強く敵を監視していれば、勝ちも転がって来ます。必ず……」

「琥珀……冷静かと思っただけれど実は緊張してる?」

「ちよ、ちよ?何を言うのかしら?私緊張なんて……」

「そうかしら?なら先程から手を……し……しているそれは何をかしら?」

「やめてえー!」

「ほら、そんなに声を出すと見つかるわよ?私はここから叢雲の方を見張るから報告と

監視を引き続きお願いね。」

「早く行つてしまつて!」

「はーい」

そつぽを向く琥珀を見て、弄られ慣れてない所は流石は白亜様の個体だと思つた。しかし、内心ではこうも思つてしまった。

(白亜様の写しとも言える傀儡で、しかも作戦立案に深く関わる彼女が緊張しているとみると、当の白亜様が心配だわ……)

考えすぎかとも思つてもやはり気にはなつてしまう。もしかすると、予想以上に白亜様には厳しい1日になりそう……そう思えてならない砂生だつた。

(まあ、それを補佐するのはきつとあの子の役目かしらね……)

□

「これより、白波屋防衛計画を始動します」

静かな大広間の長机の前で、砂夜は声を発した。彼女の後ろには白亜、そして前にはおびただしい数の人、いや土傀儡達が整列している。いずれも白亜がこの日の為に用意

した戦闘目的の個体達、町へ向かう部隊とこの館に残る守備兼予備兵力である。

「計画の内容はすでに白亜様より聞いての通りです。戦力、装備を含めて可能な限りをつくしたつもりです。」

彼女の言葉に意思を持たない彼らがどれだけ反応しているのかはわからない。ただ、前の彼女らだけは真剣に聞いてくれている。

「既に町に入った仲間からの報告によれば、鬼殺隊は動いたそうです。しかしもこれらの予想下の戦力です」

これには白亜が内心落胆した。つまり、彼らは宛にできない。いや、そもそもならないからそこ立ち上がったのだ。

「白亜様」

「うん。……さて、私はいついなくなるかはわからない。だから、皆……頼んだよ。」

本当ならここは激の一つでも飛ばしてかっこよく決めたい所ですが、情けないことに弱い言葉しかでない。

しかし、私の言葉に傀儡達は一斉に敬礼。更に数名からオー！と掛け声も聞こえる。

「それでは、持ち場について下さい！」

「砂夜ちゃん。お願いね」

「お任せください白亜様！」

私の軍の人選は、索敵、現場指揮を琥珀ちゃんに一任し、その補佐を砂生ちゃんにお願いしている。

そして、砂夜ちゃんは私が留守の間のこの館の防衛指揮と帰った後の報告係を任せている。

既に伏兵は配置の完了はしており、残りは琥珀ちゃんの求めに応じて投入する増援部隊、そして本命を食い止めるための主力である。

「順調に進めば琥珀ちゃん達も合流して敵を叩く……うまく行けばいいな……」

私は砂夜ちゃんにあとは任せると書齋にて静かに座した。あとはいつそのときが来るのかを待つのみでした。

□

この町は商業が盛んなこともあり、多くの商会や彼らの所有する施設が多く存在する。そんな彼らの知恵かもしくはただの偶然かはわからないが彼らの店や倉庫のある

商業区と彼らの住む住居区に別れている。

その為、勤務時間を過ぎると途端に人がいなくなり、ほとんどが住居か夜の屋台などで過ごしている。

事態はそんな人のいない日が落ちた時刻に始まった。そんな人のほぼいないはずの商業区で今、荒い呼吸を繰り返す男がいた。表情も疲弊の色が濃い。

背に滅の字が入った隊服を纏う男、いや男達は刀を振るっている。相手は絶叫を放ちながら彼らへと突撃をしかけてくる。

もはや人ではない者達……鬼の大群だった。

叢雲商会の保有する倉庫郡に囚われていた彼らは一斉に放たれると一直線に白波屋の方角へと進んで行った。それを巡回していた鬼殺隊が発見し戦闘は始まった。

戦闘の展開は激しく、数で勝る鬼が優勢だった。剣士の一人が鬼を一人斬り殺してもその後ろから敵が怯むことなく迫ってくる。

その物量と敵の激しい突撃に警備隊の迎撃は突破され次々と進んでいく。

あまりの敵の攻勢に鬼殺隊も白波屋の隊を回して応戦、巻き返しを図るもなお敵の攻撃も凄まじいもので舞い上がる砂塵に飛び散る血洩きと、まさに地獄のような光景となった。

そして、その光景を眺めて不適な微笑をする者がいるのだった。

「始まったわね・」

琥珀は害虫を噛み締めるような表情だった。叢雲商会を見張っていた砂生から倉庫郡から鬼の大群が出ていくのを聞いて、それを偽装して紛れている伏兵を使い鬼殺隊に伝えて彼らが有利に彼らを迎え撃てるよう誘導したまでは良かった。

ただ、予想外だった。

鬼殺隊が大したことないのははや解りきっていたので別に問題ではない。むしろあの数：：私が見た倉庫だけでなくまだ他にもあったようでかなりの数がある。

それをよく防いでいるし、正直雑魚鬼程度なら彼らでもいけると思っていた。

ところが、相手の鬼の方が異常である。

「どうして?どうして死を恐れてないの?」

彼らの捨て身の攻撃には雑魚鬼でも流石に手は焼いてしまう。その上この量である。

「空腹で意思がおかしくなってる?いやそれにしても限度があるし：：何かたかが外れたような・」

まさか何らかの手段で彼らを狂暴化してるのか?もしそうならばこのままでは彼ら

は全滅してしまう……

「はあ……偽装剣士隊！突入よ！」

琥珀が命じると鬼郡の後ろから新手の鬼殺隊ではなく彼らの服を着て偽装した傀儡兵達が斬りかかる。

「よし……しかしこれで鬼殺隊の大半はこちらに取られてしまいましたね。ここまでは敵の目論見通りかしら？」

さて、ここからです。

「石華のメンバーのお手並み拝見です」

戦場から大分離れて白波屋前の物陰に複数の武装集団が隠れており、周囲を包囲していた。彼らは鬼ではなくただの人間。叢雲商会の襲撃部隊である。

「鬼狩りどもはほとんどが隊長の策に釣られたようだな。」

「はい。残りの警備も僅かです。やるなら今かと」

「商会の別動隊は？」

「それが……それらしき者がまだ……」

「なんだと?!」

「実は数日前から姿を消しているとか…」

「むむ、ならば仕方ない。こうなれば我々が」

「む? 副隊長! 向こうより顔などを布で隠した三人が近付いております」

「おう! それがきつと別動隊だ! よし! かかれ! 鬼狩り達を皆殺しだ!」

副隊長と呼ばれた男の指示で部隊は動き始めた。彼らは静かに動き物陰から物陰へと動いて少しずつ近づいた。そして、手頃な位置につくと一斉に銃を構えた。琥珀が倉庫で見たのは鬼のカムフラージュを兼ねた彼ら用の兵装だったので。

いくら鍛練された剣士でも、銃で奇襲されては堪らなかつた。多くは銃殺され、残りもそれに合わせて突撃した兵に突き殺されてしまった。

鬼殺隊士や白波屋の奉公人達の応戦虚しくあつという間に鎮圧されあとは火事に見せかけて別動隊がここに匿われている店主の娘達を拐うだけ、それだけだった。

しかし、

「う、うわー!!?」

「ぎゃああああ!!」グサツ

突如悲鳴が起きる。何かと事態を確認すると、別動隊と思っていた三人が部隊を襲っているのだ。

そう。彼ら：敵が味方だと勘違いしていた彼女らこそが白亜の切り札だった。

「目標を捕捉・撃破！目標を捕捉・撃破！」

まず一人はとても細身のツインテールの少女。その細身に不釣り合いな大きさの腕を振り回し、敵を一人一人潰していた。

敵兵が複数で銃を放つ。彼女は避けようとはしないでその腕で銃弾を全て弾く。すると今度はお返しとばかりに腕を相手に向けて広げると、その掌に穴が開き、そこから石の礫がまるで砲弾のように発射される。

「な、何だ！あの化け物は!？」

アイツだけではない！二人目の長身にまるで聖職者のような格好をした女性に三人目の死んだ魚みたいな目をした女も異能な力を使い次々と兵を虐殺していく。

「な、何だ・一体・ま、まさか鬼か!？」

その異様な光景に戦い慣れしているはずの彼は怯え固まってしまふ。そんな怯えきった副隊長の前に、聖職者のような女性が立つ。

「すみません：はい鬼ではないです予想を裏切つてひい！ごめんなさい！」
「はあ？」

な。なんだ？急に謝り始めた。いや、懺悔し始めた。

「鬼じゃなくてすみません！違つててすみません！生まれてきてすみません!!」

「いや〜お前コンセは聖職者ぽいなにかだろ？懺悔される側だろ？何懺悔してるん？」
後から現れた死んだ魚目の女だ。

「うう：ごめんなさい〜！」

「はあ：まあいいや。コイツが頭みたいじゃん？ならサクツとやつてよ」

「うん！」

「ちよまつ!？」

彼女が頷き祈り始めると石の壁が現れる。そして、彼女は現れた石の壁を押し倒して
きた。

「あなたを潰しますけど：ごめんなさい！」

「うつつわわー!!?」 ベちゃ!

「ああ〜罪深い私をお許しを〜!!」

「はあ：面倒くさい」

「殲滅せよ：」

「あれがマスター自慢の石華の火水変の三人：：自立自我の個体を三体も用意したのね。」

「これで敵の襲撃部隊は壊滅寸前。問題はあの鬼だけど：：叢雲を見張っている砂生が何か掴んでいるかしら？」

「こちら琥珀、砂生そちらはどう？：：砂生？」

『嘘でしょ：：どうしてよ。どうして：：!?!』